

吉原新話

泉鏡花

青空文庫

表二階の次の六畳、階子段の上り口、余り高くない天井で、電燈を捻つてフツと消すと……居合わす十二三人が、皆影法師。

仲の町も水道尻に近い、蔦屋という引手茶屋で。間も無く大引けの鉄棒が廻ろうという時分であつた。

閏のあつた年で、旧暦の月が後れたせいか、陽気が不順か、梅雨の上りが長引いて、七月の末だというのに、畳も壁もじめじめする。

もつともこの日、雲は拭つて、むらむらと切れたが、しかしほんとうに霽つたのでは無いらしい。どうやら底にまだ雨氣がありそうで、悪く蒸す……生干の足袋に火熨斗を当てて穿くようで、不気味に暑い中に冷りとする。

氣候はとにかく、八畳の表座敷へ、人数が十人の上であるから、縁の障子は通し四枚とも宵の内から明放したが、夜桜、仁和加の時とは違う、分けて近頃のさびれ方。仲の町でもこの大一座は目に立つ処へ、浅間、端近、戸外へ人立ちは、嬉しがらないのを知つて、

家の姉御が氣を着けて、簾という処を、幕にした。

廂へ張つて、浅葱に紺の熨斗進上、朱鷺色鹿の子のふくろ字で、うめという名が一絞ひさしり。紅あざぎの括くれない紐くくりひも、襷たすきか何ぞ、間に合わせに、ト風入りに掲げたのが、横ひとしほに流れて、地ぢが縮ちりめん緬なまめの媚なまめかしく、臙おぼろに颯さつと紅梅の友染さばを捌さばいたような。

この名は数年前、まだ少わかくつて見番の札を引いたが、家の抱妓うぢで人に知られた、梅次かかえというのに、何か催もよおしのあつた節、鼻眞ひいきの贈うしろまくつた後、幕まくが、染返かえしの搔か巻まきにもならないで、長持ながもちの底に残つたのを、間に合わせに用いたのである。

端唄はうたの題に出されたのも、十年近く以前であるから。見たばかりで、野路のじの樹じとも垣根かきの枝えだとも、誰も氣の着いたものはなかつたが、初め座の定まった処へ、お才さいという内の姉御あねが、お茶聞ちやきしめせ、と持つて出て、梅干うめごも候まうぞ。

「いかがですか、甘露梅かんろばい。」

と、今めかしく註しゆを入れたは、年紀としの少わかい、学生まじも交まじつたため。

「お珍めづらしくもありませんが、もう古ふるいんですよ、私わたしのように。」
と笑いながら、

「民たみさん、」

と、当夜の幹事の附添いで居た、佐川民弥たみやという、ある雑誌の記者を、ちよいと見て、「あの妓こなんか、手伝ったのがまだそのままなんです。召あがれ。」と済まして言う。

様子を知った二三人が、ふとこれで気が着いた。そして、言合わせたように民弥を見た。もつとも、そうした年紀としではなし、今頃はもう左衛門で、女房の実の名も忘れていゝほどであるから、民弥は何の気も無さそうに、

「いや、御馳走ごちそう。」

時に敷居の外の、その長六畳ながの、成りたけ暗そうな壁の処へ、紅入友染べにいりゆうぜんの薄いお太鼓おつを押着けて、小さくなつたが、顔の明あかるい、眉の判然はつきりした、ふつくり結綿ゆいわたに緋ひの角つのし絞ぼりで、柄も中形も大きいがお三輪おさんりんといつて今年しちが七、年よりはまだ仇気あじけない、このお才よしのちようの娘分おしご。吉野町辺よしのちようの裁縫おしごとの師匠ししやうへ行くのが、今日は特別いっつも、平時と違つて、途中ちゆうちゆうの金貸かんだいの軒のきに居る、馴染なじみの鸚鵡おうむの前まへへも立たず……黙つて奥山の活動写真かつどうしやうしんへも外それないで、早はやめに帰つて来て、紫むらさきの包かみも解とかず、……

「道理だいりで雨が霽あがつたよ。」

嬉いそいそ々々客設けきやくせけの手伝ていした、その――

お三輪がちようど、そうやって晴がましそうに茶を注いでいた処。——甘露梅の今のを聞くと、はツとしたらしく、顔を据えたが、拗ねたという身で土瓶をトン。

「才ちゃん。」

と背後からお才を呼んで、前垂の端はきりりとしながら、褌の媚めく白い素足で、畳触りを、ちと荒く、ふいと座を起つたものである。

待遇に二つ三つ、続けて話掛けていたお才が、唐突に腰を折られて、

「あいよ。」

で、軽く衣紋を圧え、痩せた膝で振り返ると、娘はもう、肩のあたりまで、階子段に

白地の中形を沈めていた。

「ちよつと、」……と手繰つて言つたと思うと、結綿がもう階下へ。

「何だい。」とお才は、いけぞんざい。階子段の欄干から俯向けに覗いたが、そこから目薬は注せなそうので、急いで降りた。

「何だねえ。」

「才ちゃんや。」

と段の下の六畳の、長火鉢の前に立ったまま、ぱつちりとした目許めもとと、可愛らしい口許で、引着けるようにして、

「何だじやないわ。お気を着けなさいよ。梅次姉ねえさんの事なんか言つて、兄さんが他ほかの方に極きまりが悪いわ。」

「ううん。」と色気の無い頷うなずき方。

「そうだつけ。まあ、可いいやね。」

「可よかない事よ……私は困よつちまう。」

「何だねえ、高慢な。」

「高慢じやないわ。そして、先生と云うものよ。」

「誰をさ。」

「皆さんをさ、先生とか、あの、貴方あなたとか、そうじやなくなつて。誰方どなたも身分のある方なのよ。」

「よ。」

「そうかねえ。」

「そうかじやありませんよ。才ちゃんてば。……それをさ、民さんだの、お前まはんだのつ

て……私は聞いていてはらはらするわ、お気を注げなさいなね。」

「ああ、そうだね、」

と納得はしたものの、まだ何だか、不心服らしい顔色で、

「だって可いやね、皆さんが、お化の御連中なんだから。」

習慣で調子が高い、ごく内の話のつもりが、処々、どころでない。半ば以上は二階へ

届く。

一同くすくすと笑った。

民弥は苦笑したのである。

その時、梅次の名も聞えたので、いつの間にか、縁の幕の仮名の意味が、誰言うことなく自然と通じて、投遣りな投放しに、中を結んだ、紅、浅葱の細い色さえ、床の間の籠に投込んだ、白い常夏の花とともに、ものは言わぬが談話の席へ、仄な佛に立っていた。が、電燈を消すと、たちまち鼠色の濃い雲が、ぼつと落ちて、廂から欄干を掛けて、引包んだようになつた。

夜も更けたり、座の趣は変わったのである。

かねて、こうした時の心を得て、壁際に一台、幾年にも、ついぞ使った事はあるまい、

艶つやの無い、くすぶつた燭しよくだい台の用意はしてあつたが、わぎと消したくらいで、蠟燭ろうそくにも及ぶまい、と形かただけでも持出さず——所帯構わぬのが、衣紋えもんだけ竹の替りにして、夏羽織なつばりをふわりと掛けておいた人がある——そのままになっている。

灯あかり無しで、どす暗い壁くつつに附着くつついた件の形は、蝦蟆がまの口から吹出す靄もやが、むらむらとそこで蹲うすくま踞うすくまつたよう、居合いあわす人数の姿より、羽織うずくまの方が人らしい。そして、……どこを漏ともしびれて来る燈ともしびの加減かへんやら、縞ろの縞しまの袂たもとを透といて、螢ひとつみを一ひとつみ包あにしたほどの、薄あおら蒼おい、ぶよぶよとした取留とりとめの無い影かげが透とく。

三

大方はそれが、張出し幕の縫目を漏ぼろれて茫ぼろと座敷へ映るのであろう……と思う。欄干らんかん下したの廂ひさしと擦おれ擦もれな戸外おもてに、蒼白あすい瓦斯ひともとが一ひともと基おおもんぐち、大門口おおもんぐちから仲の町にずらりと並んだ中の、一番末の街燈がある。

時々光を、幅ほとば広く逆さかしらして、潤かと明るくなると、燭しよくだい台ひつかに引掛けた羽織の袂たもとが、すつと映る。そのかわり、じつと沈んで暗くなると、紺の縦縞きんぎょが消き々えんになる。

座中は目で探つて、やつと一人の膝、誰かの胸、別のまた頬のあたり、片袖などが、風で吹溜つたように、断々に仄に見える。間を隔てたほどそれがかえつて濃い、つい隣合つたのなどは、真暗でまるで姿が無い。

ふと鼠色の長い影が、幕を斜違いに翻々と伝わたり……円さ六尺余りの大きな頭が、ぬいと、天井に被さりなどした。

「今、起ちなすつたのは魯智深さんだね。」

と主は分らず声を懸ける。

「いや、私は胡坐搔いています、どつしりとな。」

とわざと云う。……描ける花和尚さながらの大入道、この人ばかりは太ッ腹の、あぶらぼてりで、宵からの大肌脱。絶えずはたと鳴らす団扇づかい、ぐいと、抱えて抜かないばかり、柱に、えいとこさで凭懸る、と畳半畳だぶだぶと腰の周圍に隠れる形。けれども有名な琴の師匠で、芸は嬉しい。紺地の素袍に、烏帽子を着けて、十三絃に端然と直ると、松の姿に霞が懸つて、琴爪の千鳥が啼く。

「天井を御覧なさい、変なものが通ります。」

「厭ですな。」と優しい声。

当夜、二人ばかり婦人も見えた。

これは、百物語をしたのである。――

会をここで開いたのは、わざと引手茶屋を選んだ次第では無かった。

「ちつと変つた処で、好事ものずきに過ぎると云う方もございましょう。何しろ片寄り過ぎますんで。しかし実は席を極きめるのに困りました。

何しろこの百物語……怪談の会に限つて、半夜は途中で不可いけません。夜が更けるに従つて……というのですから、御一味を下さる方も、かねて徹夜というお覚悟です。処で、宵から一晚の註文で、いや、随分方々へ当つて見ました。

料理屋じゃ、のつけから対手あいてにならず、待合申すまでも無い、辞退。席貸をと思いましたが、やつぱり夜一夜よつびてじゃ引退ひきさがるんです。第一、人数が二十人近くで、夜明しと来ては、成程、ちよつとどここといつて当りが着きません。こりや旅籠屋はたごやだ、と考えました。

これなら大丈夫、と極めた事になると、どういたして、まるで帳場で寄せつけません、無理もございますまい。旅籠屋は人の寝る処を、起きていて饒舌しゃべろうというんです。傍はたが御迷惑をなさる、とこの方を関所破りに扱います、困りました。

寺方はちよつと聞くと可いいようで、億劫おつくうですし、教会へ持込めば叱ちられます。離れた

処で寮なんぞ借りられない事もありませんが——この中にはその時も御一所で、様子を御存じの方もお見えになります、昨年の盆時分、向島の或別荘で、一会催した事があるんです。

飛んだ騒ぎで、その筋に御心配を掛けたんです。多人数一室へ閉籠つて、徹夜で、密々そひそと話をするのが、寂しんとした人通ひとどおりの無い、樹林きばやしの中じゃ、その筈はずでしょう。お引受け申して、こりや思懸けない、と相応に苦勞あげくをしました揚句、まず……昔の懺悔ざんげをしますような取詰め方で、ここを頼んだのでございます。

言訳を申すじやありませんが、以前だとて、さして馴染なじみも無い家うちが、快く承わつてくれました、どうやらお間に合わせます事が出来ました。

ちと唐突だしぬけに変わった誂あつらえだもんですから、話の会だと言いますと、

(はあ、おはなの……) なんてな、此家ここの姉御あねごが早合点はやがってんで……」

と笑いながら幹事が最初挨拶あいさつした、——それは、神田辺の沢岡という、雑貨店の好ものず事きな主人であつた。

連中には新聞記者も交つたり、文学者、美術家、彫刻家、音楽家、——またそうした商
 人もあり、久しく美学を研究して、近頃歐洲から帰朝した、子爵が一人。女性と
 いうのも、世に聞えて、……家のお三輪は、婦人何々などの雑誌で、写真も見れば、名も
 読んで知つた方。

で、こんな場所は、何の見物にも、つい足踏をした事の無いのが多い。が、その人た
 ちも、誰も会場が吉原というのを厭わず、中にはかえつて土地に興味を持って、到着
 帳に記いたのものもある。

「吉野橋で電車を下りますまでは無事だったんですよ。」

とそれについて婦人の一人、浜谷蘭子が言出すと、可恐く気の早いのが居て、

「ええ、何か出ましたかな。」

「まさか、」

と手巾をちよつと口に当てて、臉をほんのりと笑顔になつて、

「お化が貴下、わざわざ迎いに出はしませんよ。方角が分りませんもの。……交番がござ
 んしたから、——伺いますが、水道尻はどう参りませうかかって聞いたんです。巡查さ

んが真面目な顔をして、

（水道はその四角の処にあります。）って丁寧に教えられて、困ったんです。」

「水を飲みたくって、それで尋ねたんだと思つたんでしようよ。」とその連だつたもう一人の、明座種子が意気な姿で、そして膝に手をきちんとして言う。

「私もはじめてです。両側はそれでも画に描いたようすな。」と岩木という洋画家が応じた。

「御同然で、私はそれでも、首尾よく間違えずに来たですよ。北廓だというから、何でも北へ北へと見当を着けるつもりで、宅から磁石を用意に及んだものです。」と云う堀子爵が、ぞんざいな浴衣がけの、ちよつきり結びの兵児帯に搦んだ黄金鎖には、磁石が着いていも何にもせぬ。

花和尚がその諸膚脱の脇の下を、自分の手で擦るように、ぐいと緊めて腹を揺つた。「そろそろ怪談になりますわ。」

確か、その時分であつた。壇の上口に氣勢がすると、潰しの島田が糶上つたように、欄干隠れに、少いのが密と覗込んで、

「あら、可厭だ。」

と一つ婀娜な声を、きらりと銀の平打に搦めて投込んだ、と思うが疾いが、ばたばたと階下へ駆下りたが、

「嘘、居やしないわ。」と高い調子。

二言、三言、続いて花やかに笑ったのが聞えた。駒下駄の音が三つ四つ。

「覚えていらつしやいよ。」

「お喧しゅう……」

魯智深は、ずかずかと座を起つて、のそりと欄干に腹を持たせて、幕を透かして通を瞰下し、

「やあ、鮮麗なり、おらが姉さん三人ござる。」

「君、君、その異形なのを空中へ躡すと、可哀相に目を廻すよ。」と言いなながら、一人が、下からまた差覗いた。

「家の娘かね。」

と子爵が訊く。差向いに居た民弥が、

「いいえ。」

「何です。」

「やっぱり通り魔の類でしような。」

「しかし、不意だからちよつと驚きましたよ。」とその洋画家が……ちよつと俯向いて巻
きたばこ
蓑 をつけていた処、不意を食った眼鏡が晃つく。

当夜の幹事が苦笑いして、

「近所の若い妓どもです……御存じの立旦那形が一人、今夜来ます筈でしたが、急用で伊
勢へ参つて欠席しました。階下で担いだんでしよう。密と覗きに……」

「道理こそ。」

「(あら可厭だ)は酷いな。」

五

「おおおお、三人が手を曳ッこで歩行いて行きます……仲の町も人通りが少いなあ、どう
じやろう、景気の悪い。ちらりほらりて軒行燈に影が映る、——海老屋の表は真暗だ。
ああ、揃つて大時計の前へ立佇つた……いや三階でちよつとお辞儀をするわ。薄暗い
処へ朦朧と胸高な扱帯か何かで、寂しそうに露れたのが、しよんぼりと空から瞰下ろし

ているらしい。」

と円い腕を、欄干が挫げそうにのツしと支いて、魯智深の腹がたぶりと乗出す……

「どこだ、どれ、」

と向返る子爵の頭へ、さそくに、ずずんと身を返したが、その割に気の軽さ。突然見

越入道で、蔽われ掛つて、

「ももんがああ！ はツはツはツ。」

「失礼、只今は、」

と、お三輪が湯を注しに來合わせて、特に婦人客の背後へ來て、極の悪そうに手を支いた。

「才ちゃんが、わけが分らなくつて不可ません、芸者衆なんか二階へ上げて。」

と言も極つて含羞んだ、紅い手絡のしおらしさ。一人の婦人が斜めに振向き、手に持ったのをそのままに、撫子に映す扇の影。

「いいえ。そして……ちとお遊びなさいませ。」

「はい、あの、後にどうぞ。」

と嬉しそうに莞爾しながら、

「あの、明る過ぎましたら電燈をお消し下さいましな、燭台をそこへ出しておきました。」

と幹事に言う。雑貨店主が、

「難有う、よくお心の着きます事で。」

「あら、可厭だ。……と蓮葉になる。」

「二ツ、」

と一人高らかに呼わつた。……芸者のと、（可厭だ）が二度目、という意味だけれども、娘には気が着かぬ。

「え？」

民弥が静に振返つて、

「三輪ちゃんの年紀は二十かかって？」

「あら、可厭だ。」

「三つ！」

「じゃ、三十かかってさ。」と雑貨店主が莞爾する。

「知らないわ。」

「まあまあ、可いわ、お話しなさい。」と花和尚、この時、のきのさと座に戻る。

「お茶を入れかえて参ります。」

と、もう階子の口。ちよつと留まつて、

「そして才ちゃんに、御馳走をさせましょうね。兄さん、（吃驚したように）……あの、

先生。」

「心得たもんですな。」と洋画家が、煙草の濃い烟の中で。

「貴女方の御庇です……敬意を表して、よく小老実に働きますよ。」と民弥が婦人だちを見向いて云う。と二人が一所に、言合わせたように美しく莞爾して、

「どういたしまして。」

「いや、事実ですよ……家はこんなでも、裁縫に行く先方に、また、それぞれ朋だちがありましてな、それ引手茶屋の娘でも、大分工合が違って来ました。どうして滅多に客の世話なぞするのじやありませんや。貴女がたの顔まで、ちゃんと心得ていて、先刻も手前ちよつと階下へ立違いますと、あちらが、浜谷さんで、こちらが、明座さんでしょう、なんてそう言います。

廓がはじめてだつてお言いなされたのを聞いたと見えて、御見物なさいませんか、お供

をして、そこいら、御案内をしましょう、と手前にそう言っていましたつけ。」と団扇うちわを構えて雑貨店主。

「そう、まあ……見て来ましようか。」

「ねえ。」と顔を見合させた。

子爵かぶりが頭を振りながら、

「お止よしなさい、お揃いじや、女郎じよろが口惜くやしがるでしよう、罪だ。」

六

「なぜですか。」

「新橋、柳橋と見えるでしよう。」

「あら、可いや厭だ。」

「四つ、」

と今度は、魯智深が、透かさず指を立てて、ずいと揚げた。

すべてがこの調子で、間へ二ツ三ツずつ各自めいめいの怪談が挟まる中へ、木皿に割わり箸ばしをぎ

つくり揃えて、夜通しのその用意が、こうした連中に幕の内でもあるまい、と階下で氣を
 着けたか茶飯の結びに、はんぺんと菜のひたし。……ある大籬の寮が根岸にある、そ
 の畠に造つたのを掘たてだというはしりの新芋。これだけはお才が自慢で、すじ、蒟
 蒻などと煮込みのおでんを丼へ。目立たないように一銚子附いて出ると、見ただけで
 も一口呑めそう……梅次の幕を正面へ、仲の町が夜の舞台で、楽屋の中入といった様子
 で、下戸までもつい一口飲む。

八畳一杯赫と陽気で、ちようどその時分に、中びけの鉄棒が、近くから遠くへ、次第
 に幽かになつて廻つたが、その音の身に染みたは、浦里時代の事であろう。誰の胸へも響
 かぬ。……もつとも話好きな人ばかりが集つたから、その方へ氣が入つて、酔つたものは
 一人も無い。が、どうして勢がこんなであるから、立続けに死霊、怨霊、生霊
 まで、まざまざと頭れても、凄く可恐いはまだな事——汐時に颯と支度を引いて、煙
 草盆の巻、菘の吸殻が一度綺麗に片附く時、蚊遣香もぼつたり消えて、畳の目も初
 夜過ぎの陰気に白く光るのさえ、——寂しいとも思われぬ。

(あら可厭だ)……のそれでは無い。百万遍の数取りのように、一同ぐるりと輪になつて、
 じりじりと膝を寄せると、千倉ヶ沖の海坊主、花和尚の大きな影が幕をはびこるのを張合

いにして、がんばり入道、ずばい坊、鬼火、怪火、陰火の数々。月夜の白張、宙釣りの丸行燈、九本の蠟燭、四ツ目の提灯、蛇塚を走る稲妻、一軒家の棟を転がる人

魂、狼の口の弓張月、古戦場の火矢の幻。

怨念は大鰻、古鯰、太岩魚、化ける鳥は鷺、山鳥。声は鼻、山伏の吹く貝、

磔場の夜半の竹法螺、焼跡の呻吟声。

蛇ヶ窪の非常汽笛、箒川の悲鳴などは、一座にまさしく聞いた人があつて、その響

も口から伝わる。……按摩の白眼、癩坊の鼻、婆々の逆眉毛。気味の悪いのは、三本

指、一本脚。

廁を覗く尼も出れば、藪に蹲む癖の下女も出た。米屋の縄暖簾を擦れ擦れに消える蒼

い女房、矢絣の膝ばかりで搔卷の上から圧す、顔の見えない番町のお嬢さん。干すと

窄まる木場辺の渋蛇の目、死んだ頭の火事見舞は、ついおもだか屋にあつた事。品川沖の

姪の影、真乳の渡の朧蓑、鰻搔の蝮笊。

犬神、蛇を飼う婦、墓を抱いて寝る娘、鼈の首を集める坊主、狐憑、猿小僧、骨な

し、……猫屋敷。

で、この猫について、座の一人が、かつてその家に飼った三毛で、年久しく十四五年を

経た牝めすが、置炬燵おきこたつの上で長々と寝て、密そつと薄目みひらを睜くと、そこにうとうとしていた老としよ人の顔を伺った、と思えば、張裂けるような大欠伸おおあくびを一つして、

(お、お、しんど)と言つて、のさりと立つた。

話した発奮はつみに、あたかもこの八畳と次の長六畳との仕切が柱で、ずつと壁で、壁と壁との間が階子段はしごだんと向むかい合せに櫺子窓れんじまどのように見える、が、直ぐに隣家となりの車屋の屋根へ続いた物干ひとまた。一跨ひとまたぎで出られる。……水道尻まで家続きだけれども、裏手ひあわい、廂合むらなが連るばかり、近間ちかまに一ツも明あかりが見えぬ、陽気な座敷に、その窓ばかりが、はじめから妙に陰気で、電燈でんきの光も、いくらかずつそこへ吸取られそうな氣勢けはいがしていた。

その物干の上と思う処で……

七

「ゴロゴロ、」

と濁った、太い、変に地響きのする声が出た、——不思議は無い。猫が鳴いた事は、誰の耳にも聞えたが、場合が場合で、一同が言合わせたごとく、その四角な、大きな、真まっく

暗^{くら}な穴^{あな}の、遙^{はる}かな底^{そこ}は、上野天王寺の森の黒雲が灰色の空に浸^{にじ}んで湧^{わきあ}上^ある、窓を見た。フト寂しい顔をしたのもあるし、苦笑いをしたのもあり、中にはピクリと肩を動かした人もあつた。

「三輪^{みい}ちゃん、内の猫かい。」

民弥は、その途端に、ひとと身を寄せたお三輪に訊ねた。……遠慮をしながら、成^{なる}たけこの男の傍^{そば}に居て、先刻^{さつき}から人々の談話^{はなし}の、凄^{すこ}く可^{おそ}恐^ろい処^{ところ}というと、密^{そつ}と縫^{すが}り縫^ぬり聞^きいていたのである。

「いいえ、内の猫は、この間死にました。」

「死んだ？」

「ええ、どこの猫でしょう……近所のは、皆^{みんな}たま（猫の名）のお友達で、私は声を知つてゐるんですけれど……可^{いや}厭^{いな}な声ね。きつと野良猫よ。」

それと極^{きま}つては、内^{ない}所^{しよ}の飼猫^{きねこ}でも、遊^{あそ}女^{にょ}の秘蔵^{ひざん}でも、遣手^{やりて}の懐^{ふとこころ}児^こでも、町内の三毛^{ぶち}、斑^{ふち}でも、何のと引手茶屋の娘^{むすめ}の勢^{いきおい}。お三輪は気軽に衝^つと立^たつて、襟脚^{えりあし}を白々と、結^ゆ綿^{いわた}の赤い手絡^{てがら}を障子^{しやうじ}の棧^{さん}へ浮出したように窓^{まど}を覗^{のぞ}いた。

「遁^にげてよ。もう居やしませんわ。」

一人の婦人が、はらはらと後毛おくれげのかかった顔で、

「姉さん。」

「はい、」と、呼ばれたのを嬉しそうな返事をする。

「閉めていらつしやいな。」

で、蓮葉はすはにびたり。

後に話合うと、階下したへ用達しになど、座を起たつて通る時、その窓の前へ行くと、希代きたいにヒヤリとして風が冷い。処で、何心なく障子をスーツと閉めて行く、……帰りがけに見るとさりと開あいている。が、誰もそこへ坐るのでは無いから、そのままにして座に戻る。また別人が立つ、やつぱりぞつとするから閉めて行く、帰りがけにはちゃんと開けてあつた。それを見た人は色々で、細目の時もあり、七八分目の時もあり、開放ゆしの時もあった、と言う。

さて、そのときまでは、言ったごとく、陽氣立たつて、何が出て、ものが身に染むとまでは至らなかつたが、物語の猫が物干の声になつてから、各自おのおの言合あわせたように、膝が固かたまつた。

時々灰吹の音も、一ツ鉦かねのようにカーンと鳴つて、寂然しんと耳みみに着く。……

「気合あたらが更あらたまると、畳もかつと広くなつて、向合むかいあい、隣同士、ばらばらと開けて、間あわいが隔わるわるように思おもわれるので、なおひしひしと額ぬかを寄よせる。

「消けそうか、」

「大人おとな気きないが面白おもしろい。」

「ここで電燈でんぎが消けえたのである。——

「案外あんどう身に染しみて参まりました。人数にんずの多おほ過ぎなせいもありましよう。わざと灯あかりを消けしたり、行燈あんどうに変かえたりしますと、どうもちと趣向しゆかうめいて、バツタリ機巧からくりを遣やるようようで一向潮いっこうしほが乗のりません。」

「前せんの向島むかしまの大連おほなの時ときで、その経験きんげんが有ありますから、今夜こんやは一番ひとつ、明晃あかりしやうこう々とさして、どうせあつち顯あれるものなら真昼まひる間まおいでなさい、明白めいぱくで可いい、と皆みなさんとも申合まをせていましたつけ。」

「いや、こうなると、やつぱり暗くらい方が配合うつりが可ようございます、身みが入いりませ、これから。」

「と言いう、幹事かんじ雜貨店ざっかてん店主てんしゆの冴さえた声こゑが、キヤキヤと刻きぎ込こみ込んで、響ひびいて聞きえて、声こゑを聞きく内うちだけ、その鼻はなの隆たかい、瘦やせて面長おもながなのが薄あら蒼あおく、頬ほのげつそりと影かげの黒くろいのが、ぶ

よぶよとした出処でしこの定かならぬ、他愛あかりの無い明に映つて、ちよつとでも句が切れると、はたと顔も見えぬほどになつたのである。

八

灯あかりは水道尻すいどうしりのその瓦斯がすと、もう二ツ——一ツは、この二階にすつかいから斜違なな、京町きやうまちの向う角かどの大きな青楼あおろうの三階さんかいの、真角まつかど一ツ目の小座敷せうざしきの障子しょうじを二枚両方りょうほうへ明放あかりした裡うちに、青い、が、べつとりした蚊帳かやを釣つつて、行燈あんどうがある、それで。——夜目よめには縁ちんかんも欄干らんかんも物色うかがわれず、ただその映うつしだ出した処ところだけは、たとえば行燈あんどうの枠はの剥はげたのが、朱塗しゆぬりであろう……と思おもわれるほど定さだかに分わる。……そこが灰ほのあかる明あかりいだけ、大空おほぞらの雲くもの黒くろさが、此方こなたに絞しぼつた幕まくらの上うへを、底知ちぞれぬ暗夜やみにする。……が、廓くわくが寂さびれて、遠とほく衣紋えもん坂さかあたりを一つ行ゆく俣まの音ねの、それも次第しだいに近くはならず、途中ちゆうちゆうの電信でんしんの柱はしらがあると、母衣ほろいが舩ふね引掛ひっかりそうさうに便たよりなく響ひびき切きれて行く光景ありさまなれば、のべの蝴ちようちよう蝶てつが飛とびそうさうな媚なまめかしさは無なく、荒廢あらいしたる不夜城ふよじやうの壁かべの崩くずれれから、菜島さいじまになつた部屋むきだが露むきだ出しで、怪おぼろづしげな隴おぼろづ月つきめく。その行燈あんどうの枕まくら許もとに、有あろう？ 朱羅宇しゆらおの長煙管ながぎせるが、蛇へびになつて動おどきそうさうに、蓬おどろお

どろと、曠野に徜徉う夜の氣勢。地蔵堂に釣つた紙帳より、かえつて侘しき草の闌かな。風の死んだ、寂とした夜で、あたかも宙に拵げたような、蚊帳のその裾が、そよりと戦ぐともしないのに、この座の人の動くに連れて、屋の棟とともに、すつと浮いて上つたり、ずうと行燈と一所に、沈んで下つたりする。

もう一つは同じ向側の、これは低い、幕の下に懸つて、真暗な門へ、奥の方から幽かに明の漏れるのが、戸の格子の目も疎に映つて、灰色に軒下の土間を茫と這うて、白い暖簾の断れたのを泥に塗らした趣がある。それと二つである。

その家は、表をずつと引込んだ処に、城の櫓のような屋根が、雲の中に陰気に黒い。両隣は引手茶屋で、それは既に、先刻中引けが過ぎる頃、伸上つて蓐を下ろしたり、仲の町の前後を見て戸を閉めたり、揃つて、家並は残らず音も無いこの夜更の空を、地に引く腰張の暗い板となつた。

時々、海老屋の大時計の面が、時間の筋を畝らして、幽な稲妻に閃めき出るのみ。二階で便る深夜の光は、瓦斯を合わせて、ただその三つの灯となる。

中のどれかが、折々気紛れの鳥影の映すように、翻然と幕へ附着いては、一同の姿を、種々に描き出す。……

時しもありけれ、魯智深が、大なる挽白のごとき、五分刈頭を、天井にぐるりと廻して、

「佐川さんや、」

と顔は見えず……その天井の影が動く。話の切目で、咳の音も途絶えた時で、ひよいと見ると誰の目にも、上にぼんやりと映る、その影が口を利くかと思われる。従って、声もがツと太く渦巻く。

「変に静まりましたな、もって来いという間の時じや、何ぞお話し下さらんか。宵からまだ、貴下あなたに限って、一ツも凄すこいのが出ませんでな、所望ですわ。」

成程、民弥は聞くばかりで、まだ一題も話さなかつた。

「差当り心当りが無いものですから、」

とその声も暗さを辿たどって、

「皆さんが実によく、種々いろいろな可おそろし恐いのを御存じです。……確たしかにお聞きになったり、また現に逢あつたり見たりなすつておいでになります。

私は、又聞きに聞いたののだの、本で読んだのぐらいな処で、それも拵こしらえものらしいのが多いんですから、差出てお話するほどのがありません。生憎あいにく……ツても可笑おかしいんですが、

ざらある人魂ひとたまだつて、自分で見た事はありませんでね。怪あやしい光物といつては、鼠くわが啣くわえ出した鱈たらの切身が、台所でぼたぼたと黄色く光つたのを見て吃驚びつくりしたくらいなものです。お話にはなりません。

けれども、嬉しがつて一人で聞かしてばかり頂いていたんでは、余り勝手過ぎます。申訳が無いようですから、詰つまらない事ですが、一つ、お話し申しませんか。

日の暮合いに、今日、現に、此家ここへ参ります途中でした。」

九

「可こ恐おそい事、ちよつと、可こ恐おそくつて。」

と例の美しい若い声が身近に聞えて、ぞつとするように袖を窄すぼめた氣勢けはいがある。

「私わたしに附くっ着ついていらつしやい。」と蘭子らんこが傍そばで、香水かおりの優しい薫かおり。

「いや、下らないんですよ、」

と、慌あわてたように民弥たみぢは急いで断ことわつて、

「ちと薄気味うすきみでも悪いようだと、御愛嬌ごあいきようになるんだけれど……何なんにも彼かにも、一向要領いこうやうりやう

を得ないんです、……時にだね、三輪ちゃん。」

とちと更まつて呼んだ時に、皆が目を灌ぐと、どの灯か、仏壇に消忘れたようなのが幽に入つて、スーと民弥のその居直つた姿を映す。……これは生帷の五ツ紋に、白麻の襟を襲ねて、袴を着でいた。——あたかもその日、繋がる縁者の葬式を見送つて、その脚で廻つたそうで、時節柄の礼服で宵から同じ着附けが、この時際立つて、一人、舞台へ出たように目に留まつた。麻は冷たい、さつくりとして膚にも着かず、肩胛は凜々しく武張つたが、中背で瘦せたのが、薄ら寒そうな扮装、襟を引合わせているので物優しいのに、細面で色が白い。座中では男の中の第一年下の二十七で、少々しいのも気の弱そうに見えるのが、今夜の会には打つてつけたような野辺送りの帰りと云う。

気のせいか、沈んで、悄れて見える処へ、打撞かつたその冷い紋着で、水際の立つたのが、薄りと一人浮出したのであるから、今その呼懸けたお三輪さえ、声に應じて、結綿の綺麗な姿が、可恐そうな、可憐な風情で、並んでそこへ、呼出されたように、座上の胸に描かれた。

「つかん事を聞くがね、どこかこの近所で、今夜あたりお産をしそうな人はあるまいか。」
と妙な事を沈んで聞く。

「今夜……ですか。」とお三輪はきつぱり聞返す。

「……そうだね、今夜、と極きまった事も無いけれど、この頃にさ、そういう家うちがありやしないかい。」

「嬰あかんぼ児こが生れる許とこ？」

「そうさ、」

「この近所、……そうね。」

せつかく聞かされたものを、あれば可いいが、と思う容ようす子すで、しばらくして、

「無いわ、ちつと離れていては悪くつて、江戸町辺。」

「そこらにあるかい。」

と氣を入れる。

「無い事よ、——やつぱり、」とうっかりしたように澄さまして言う。

「何なだい、詰つまらない。」

と民弥は低こい声こえに笑えみを漏もらした。

「ちよいと、階し下したへ行いつて、才さあちゃんに聞きいて来こましようか。」

「……………」

「ええ、兄さん、」

と遣ったが、フト黙つて、

「私、聞いて来ましよう、先生。」

「何、可い、それには及ばんのだよ。……いいえ、少しね、心当りな事があるもんだから、
そらね。」

と斜になつて、俯向いて幕張の裾から透かした、ト酔覚のように、顔の色が蒼白
い。

「向うに、暗く明の点いた家が一軒あるだろう……近所は皆閉つていて。」

「はあ、お医者様のならび、あすこは寮よ……」

「そうだ、公園近だね。あすこへ時々客では無い、町内の人らしいのが、引過ぎになつて
もちよいちよい出たり入つたりするから、少しその心当りの事もあるし、……何も夜中の
人出入りが、お産とは極らないけれど、その事だね。もしかすると、そうではあるまいか、
と思つたからさ。何だか余り合点み過ぎたようで妙だったね。」

「それに何だか、明も陰気だし、人の出入りも、ばたばたして……病人でもありそうな様子だったもんだから。」

と言つて、その明を俯向いて見透かす、民弥の顔にまた陰気な影が映した。

「でもね、当りましたわ、先生、やっぱり病人があるのよ。それでもつて、寝ないでいるの、お通夜をして……」

「お通夜？」

と一人、縁に寄つた隅の方から、声を懸けた人がある。

「あの……」

「夜伽じゃないか。」と民弥が引取る。

「ああ、そうよ。私は昨夜も、お通夜だつてそう言つて、才ちゃんに叱られました。……

その夜伽なのよ。」

「病人は……女郎衆かい。」

「そうじゃないの。」

とついまたものいいが蓮葉になつて、

「照吉さんです、知ってるでしょう。」

民弥は何か曖昧な声をして、

「私は知らないがね、」

けれども一座の多人数は、皆耳を敬てた。——彼は聞えた妓である——中には民弥の知

らないという、その訳をさえ、よく心得たものがある。その梅次と照吉とは、待宵と後

朝、と対に廓で唄われた、仲の町の芸者であった。

お三輪はサソクに心着いたか、急に声も低くなつて、

「芸者です、今じゃ、あの、一番綺麗な人なんです、芸も可いの。可哀相だわ、大變に塩

梅が悪くつて。それだもんですから、内は角町の水菓子屋で、出ているのは清川

(引手茶屋) なんですけれど、どちらも狭いし、それに、こんな処でしょう、落着いて養

生も出来ないからつて……ここでも大切な姉さんだわ。ですから皆で心配して、海老屋で

もしんせつにそう云つてね、四五日前から、寮で大事にしているんですよ。」

「そうかい、ちつとも知らなかつた。」と民弥はうっかりしたように言う。

「夜伽をするんじや、大分悪いな。」と子爵が向うから声を懸けた。

「ええ、不可いんですつて、もうむずかしいの。」

とお三輪は口惜しくやそうに、打附ぶつけて言ったのである。

「何の病気かね。」

と言う、魯智深の頭は、この時も天井で大きく動いた。

「何んですか、性しやうがちつとも知れないんですって。」

民弥は待構えてでもいたように、

「お医師いしやは廓くわくのなんだろう、……そう言つちや悪いけれど。」

「いいえ、立派な国手せんせいも綱つな曳ひきでいらつしやつたんですの。でもね、ちつとも分りませんとさ。そしてね、照吉さんが、病気になつた最初はじめつから、なぜですか、もうちやんと覺悟をして、清川を出て寮へ引移るのにも、手廻りのものを、きちんと片附けて、この春から記つけるようにしたつちや、威張つていた、小遣帳こづかいちやうの、あの、蜜豆みつまめとした処なんか、棒を引いたんですってね。おちやんはそう言つて、話して、笑いながら、ほろほろ涙を落すのよ。

いつ煩つても、ごまかして薬をのんだ事のない人が、その癖、あの、……今度ばかりは、搔卷かいまきに凭懸よりかかつていて、お猪口ちよこを頂いて飲むんだわ。それがなお心細みんないんだつて、皆みなそう云うの。

私も、あの、手に持つて飲まして来ます。

(三輪ちゃん、さようなら。) っつて俯向くんです、……枕にこぼれて束ね切れないの、私はね、櫛を抜いて密と解かしたのよ……雲脂なんかちつとも無いの、するする綺麗ですわ、そして煩つてから余計に殖えたようよ……髪ばかり長くなって、段々命が縮むんだわねえ。

——兄さん、」

と、話に実が入るとつい忘れる。

「可哀相よ。そして、いつでもそうなの、見舞に行くたんびに(さようなら)……」

十一

「それはもう、きれいに断念めたものなの、……そしてね、幾日の何時頃に死ぬんだって——言うんですとき、——それが延びたから今日はきつと、あれだつて、また幾日の何時頃だつて、どうしてでしょう。死ぬのを待っているようなの。」

ですからね、照吉さんのは、氣病だつて。それから大事の人の生命に代つて身代に死ぬんですつて。」

「身代り、」と聞返した時、どのかまた明あかりの加減で、民弥の帷子かたびらが薄く映った。且つそれよりも、お三輪の手絡てがらが、くつきりと燃ゆるように、声も強い色に出て、

「ええ、」

と言う、目も睜みはられた氣勢けはいである。

「この方が怪談じゃ、」と魯智深が寂しい声。堀子爵が居直って、

「誰の身代りだな、情人いいひとのか。」

「あら、情人いいひとなら兄さんですわ、」

と臆おくせず……人見知ひとみしりをしない調子で、

「そうじゃないの、照吉さんのは弟さんの身代りになったんですって。——弟さんはね、先生、自分でも隠してだし、照吉さんも成りたけ誰にも知らさないようにしているんだけど、こんな処の人のようじゃないの。」

学校へ通って、学問をしてね、よく出来るのよ。そして、今じゃ、あの京都の大学へ行っているんです。卒業すれば立派な先生になるんだわ、ねえ。先生。

姉さんもそればかり楽たのしみにして、地道に稼いじや、お金子かねを送っているんでしょう。

……ええ、あの、」

と心得たように、しかも他愛の無さそうに、

「水菓子屋の方は、あれは照吉さんの母さんおつかがはじめた店を、その母さんおつかが亡くなって、姉きょうだい弟二人ぼつちになつて、しようが無いもんですから、上州の方の遠い親類の人に來てもらつて、それが世話をするんですけれど、どうせ、あれだわ。田舎を打棄うつちやつて、こんな処へ來て暮そうつて人なんだから、人は好いいけれども商売は立行たちゆかないで、照吉さんには、あの、重荷こづけに小附こづけとかですつてさ。ですから、お金子でも何でも、皆姉みんなさんがして、それでも樂たのみにしているんですよ。

そうした処が、この二三年、その弟さんが、大變に弱くなつたの。困るわねえ。——試験が濟めばもう卒業するのに、一昨年おとしも去年もそうなのよ、今年もやつぱり。続いて三年病氣をしたの。それもあの、随分大煩いいですわ、いつでも、どっと寝るんですよ。

去年の時はもう危あつちないつて、電報が來たもんですから、姉さんが無理をして京都へ行つたわ。

二年続けて、彼地あつちで煩あつちらつたもんですから、今年の春休みには、是非お歸あつちんなさいつて、姉さんも云つてあげるし、自分でも京都の寒いけなさが不可いけないんだつて、久しぶりで歸あつちつたんです。

水菓子屋の奥に居たもんですから、内へも来たわ。若旦那わかだんなって才ちゃんと言うのよ。お父さんとつはね、お侍が浪人をしたのですって、——石橋際に居て、寺子屋をして、御新造ごしんぞうさんの方は、裁縫おしごとを教えたんですつさ、才ちゃんなんかの若い時分、お弟子よ。

あとで、私立の小学校になつて、内の梅次さんも、子供の内は上つてたんですさ。お母つかさんの方は、私だつて知ってるわ。品の可いい、背せいのすらりとした人よ。水菓子屋の御新造ごしんぞうさんつて、皆みんながそう言ったの。

ですもの、照吉さんは芸者だけれど、弟さんは若旦那だわね。

また煩わづらいついたのよ、困るわねえ。

そして長いので、どつと床に就ついてさ。皆みんな、お氣いきの毒どくだつて、やつぱり今の、あの海老屋の寮せうで養生じやうじやうをして、同じ部屋おんなだわ。まわり縁えんの突当りの、丸窓まるまどの付いた、池に向いた六畳むつじやうよ。

照吉さんも家業があるでしょう、だもんですから、ちよいとの隙ひまも、夜よの目も寝ないで、附つきつ切りに看病けんぱくして、それでもちつとも快よくならず、段々あんなばい塩梅しんばいが悪わるくなつて、花が散る頃ときだつたわ、お医者様もね、もうね。——

と言う、ちつと切きなそうな息いきづかい。

十二

お三輪は疲れて、そして遣瀬やるせなさそうな声をして、

「才ちゃんさあを呼んで来ましょうか、私は上手に話せませんもの。」と言う、覚束おぼつかない娘の口から語る、照吉の身の上は、一層夜露に身に染みたのであった。

「可いいよ、三輪みちゃんいで沢山だ。お話し、お話し、」と雑貨店主、沢岡が激ました。

「ええ、もうちつとだわ。——あの……それで医者様が手放したもんですから、照吉さんが一七日いちしちにち塩断しおだちして……最初はじめからですもの、断つものも外に無いの。そして願掛けをしたんですつて。どこかねえ、谷中やんなかの方です。遠くまで、朝ねえ、まだ夜の明けない内に通ったのよ。そのお底かげで……きつとそのお底だわ。今日にも明日にも、といった弟さんが、すつかり治つてね。夏のはじめに、でもまだ綿入を着たなりで、京都へ立って行つたんです。

塩断をしたりなんかして、夜も寝なかつた看病疲れが出たんだつて、皆みんなそう言ったの。すぐ後で、姉さんが病みついたんでしょう。そして、その今のような大病になつたんです。

よう。

ですがね、つい二三日前、照吉さんが、誰にも言わない事だけどって、そう云って、内の才ちゃんに話したんですって。——あの、そのね、谷中へ願掛けをした、満願、七日なぬか目よ、……一七日いちしちにちなんですもの。いつもお参りをして帰りがけに、しらしらと夜の明け時間なのが、その朝は、まだ真暗まっくらだったんですとさ。御堂を拜んで帰ろうとすると、上の見上げるような杉の大木の茂った中から、スーと音がして、ぱったり足許へ落ちて来たものがあるの。常燈明の細い灯あかりで、ちよいと見ると、鳥なんですって、死んだのかわねえ、もう水を浴びたように悚然ぞっとして、何の鳥だかよくも見なかったけれど、謎々よ、……解くと、弟は助からないって事になる……その時は落胆がっかりして、苔こけの生えた石燈籠いしどうろうにつかまって、しばらく泣きましたって、姉さんがね、……それでも、一念が届いて弟が助かったんですから……思い置く事はありません、——とさ。

ああ、きつとそれじゃ、……その時治らない弟さんの身代りに、自分がお約束をしたんだろう。それだから、ああやつて覚悟をして死んで行くゆのを待っておいでだ。事によつたら、月日なんかも、その時極きめて頼んだのかも分らない、可哀相だ、つて才ちゃんも泣いていました。

そしてね、今度の世は、妹に生れて来て甘えよう、私は甘えるものが無い。弟は可羨うらやましい、あんな大きななりをして、私に甘ったれますもの。でも、それが可愛くつて殺されない。前さきへ死ぬ方がまだ増ましだ、あの子は男だから堪こたえるでしょう、……後へ残つちや、私は婦おんなで我慢が出来ないつて言つたんですとき。……ちよいとどうしましょう。私、涙が出てよ。……

どうかして治らないものでしょうか。誰どなた方か、この中に、お医者様の豪えらい方はいらつしやらなくつて、ええ、皆さん。」

一座寂然ひっそりした。

「まあ、」

「ねえ……」

と、蘭子と種子が言交わす。

「弱つたな、……それは、」とちよいと間を置いてから、子爵つぎやが呟つぶやいたばかりであつた。

「時に、」

と幹事が口を開いて、

「佐川さん、」

「は、」

と顔を上げたが、民弥はなぜかすくむようになつて、身体からだを堅く俯向うつむいてそれまで居た。「お話しあなの続きです。——貴下あなたがその今日途中でその、何か、どうかなすつたという……それから起つたんですな、三輪ちゃんさんの今の話は。」

「そうでしたね。」とぼやりと答える。

「その……近所のお産うのありそうな処は無いかつて、何か、そういうたような事から。」

「ええ、」

とただ、腕こしまぬを拱く。

「どういう事で、それは、まず……」

「一向、話つまらない、何、別に、」と可恐おそしく謙遜けんそんする。

人々は促した。——

十三

「——気が射さしたから、私は話すまい、と思つた。けれども、行ゆき懸がりで、揉消もみけすわけに

も行かなかつたもんだから、そこで何だ。途中で見たものの事を饒舌つたが、」
 と民弥は、西片町のその住居で、安価い竈を背負つて立つ、所帯の相棒、すなわち梅次に仔細を語る。……会のあつた明晩で、夏の日を、日が暮れてからやつと歸つたが、時候あたりで、一日寝ていたとも思われる。顔色も悪く、気も沈んで、太く疲れているらしかつた。

寒気がするとて、茶の間の火鉢に向かいで、

「はじめはそんな席へ持出すのに、余り榮えな過ぎると思つたが、——先刻から言つた通り——三輪坊がしたお照さんのその話を聞いてからは、自分だけかも知れないが、何とも言われないほど胸が鬱いだよ。第一、三輪坊が、どんなにか、可恐がるだろう、と思つてね。

場所が谷中だと言うんだろう、……私の出会つたのもやつぱりそこさ。——闇がり坂を通つた時だよ。」

「はあ、」と言つて、梅次は、団扇を下に、胸をすつと手を支いた。が、黒縹子の引掛け結びの帯のさがりを斜に迂る、指の白さも、団扇の色の水浅葱も、酒気の無い、寂しい茶の間に涼し過ぎた。

民弥は寛くつろぎもしないで、端然ちやんとしながら、

「昨日きのうは、お葬式とむらいが後おくれてね、すっかり焼香の済んだのが、六時ちつと廻った時分。後で挨拶あいさつをしたり、……茶屋へ引揚げて施主たちに分れると、もう七時じやないか。」

会は夜あかしなんだけれど、ゆっくり話そうって、幹事からの通知は七時遅からず。私にも何かの都合で、一足早く。承知すずしした、と約束がしてある。……

久しぶりのお天気だし、涼すずしいし、紋着もんつきで散歩もおかしなものだけれども、ちょうど可いい。廓なかまで歩ある行いて、と家を出る時には思おもったんだが、時間が遅れたから、茶屋の角で直くくるまぐに腕車うでぐるまをそう言いってね。

乗のつてさ。出る、ともう、そこらで梟ふくろうの声こゑがする。寂寥しんとした森の下を、墓所かぶつに附ついて、薄暮はくぼ合あいに蹴込けこみが真赤まっかで、晁々さらさら輪りんが高く廻まわった、と思おもうと、早はやや坂さかだ。——切立きつたてたような、あの闇くろがり坂さか、知しつてたつけか。」

「根岸から天王寺へ抜ける、細こい狭せまい、蔽おっかぶ被かぶさった処ところでしょう。——近所でも芋坂の方かただと、ちよいちよい通とつて知しつてますけれど、あすこは、そうね、たつた一度。可い厭やな処ところだわね、そこでどうかなすつたんですか。」

「そうさ、よく路傍みちばたの草くさの中に、揃そろえて駒下駄こまげたが脱ぬいであつたり、上の雑樹ざつじゆの枝えだに蝙蝠こうぼう

傘がぶら下つていたり、鉄道で死ぬものは、大概あの坂から摺込むってね。手巾が一枚落ちていても悚然とする、と皆が言う処だよ。

昼でも暗いものだから、暮合も同じさ。別に夜中では無し、私は何にも思わなかつたんだが、極つて腕車から下りる処さ、坂の上で。あの急勾配だから。

下りるとね、車夫はたつた今乗せたばかりの処だろう、空車の気前を見せて、一つ駆けで、願卷の上へ梶棒を突上げる勢で、真暗な坂へストンと摺込んだと思うと、

むっくり線路の真中を躍り上つて、や、と懸声だ。そこはまだ、仄り明い、白っぽい番小屋の、蒼い灯を衝と切つて、根岸の宵の、螢のような水々した灯の中へ消込んだ。

蝙蝠のように飛ぶんだもの、離れ業と云つて可い速さなんだから、一人でしばらく突立つて見ていたがね、考えて見ると、面白くも何とも無いのさ。

足許だけぼんやり見える、黄昏の木の下の闇を下り懸けた、暗さは暗いが、気は晴々する。

以前と違つて、それから行く、……吉原には、恩愛もなし、義理もなし、借もなし、見得外聞があるじゃなし……心配も苦勞も無い。叔母さんに貰つた仲の町の江戸絵を、葛籠から出して頬杖を置いて見るようなもんだと思つて。」

十四

「坂の途中で——左側の、」

と長火鉢の猫板をおき圧えて言う。

「樹の根が崩れた、じとじと湿っぽい、赤土の色が蚯蚓みみずでもかたま固つたように見えた、そこにね。」

「ええ」

と梅次は眉をひそ顰めた。

「大丈夫、蛇の話じや無い。」とこれは元気よく云つて、湯吞ゆのみで一口。

「人が居たのさ。ぼんやりと小さく蹲しゃがんで、ト目に着くと可厭いやな臭気においがする、……地つちへ打ぶ坐つすわつてでもいるかぐらい、ぐしやぐしやと挫ひしやげたように揉潰もみつぶした形で、暗いから判はつき然りせん。

が、別べつに気にも留めないで、ずっとその傍わきを通抜けようとして、ものの三足みあしばかり下りた処ところだった。

(な、な、) と言う。

雪駄直せったなおしだか、唾おとしだか、何だか分らない。……聞えたばかり。無論、私を呼んだと思わないから、構かまわず行ゆこうとすると、

(なあ、) と、今度はちつとぼやけたが、大きな声で、そして、

(袴はかま着た殿い、な、) と呼懸ける、確かに私を呼んだんだ。どこの山家やまがのものか知らんが、変な声で、妙なものいいさ。「袴はかま着た、」と言うのか、「墓場やまが来た、」と言うのか、どつちにしても「殿」は気障きざだ。

が、確たしかに呼留よめたに相違ちが無ないから、

(俺おれか。)

(それよ、) ……と、気になる横柄よこがらな返事こたへをして、もやもやと背伸せのびびをして立った……らしい、頭つむりを擡もたげたのか、腰こしを起たてたのか、上う下え同しじほどに胴中どうなかの見えたのは、いずれ大分おほいの年紀としらしい。

爺じいか、婆ばあか、ちよつと見には分わらなかつたが、手てぬぐい拭ぬぐだろう、頭あたまにこう仇白あだしろいやつを畳たたんで載のせた。それが顔かほに見みえて、面つらは俯向うつむけにしなから、杖つえを支ついた影かげは映うつらぬ。

(殿いざく、な、何処いざくへな。)

と、こうなんだ。

私は黙つて視めたつけ。

じつと身動きもしないで、返事を待っているようだからね、

(吉原へ。)

と綺麗に言つたが、さあ、以前なら、きつとそうは言わなかつたらう。その空がさつぱりと晴々した心持だから、誰に憚る処も無い。おつけ晴れたのが、不思議に嬉しくもあり、また……幼い了りようけん簡かんだけれども、何か、自分でも立派に思った。

(真北じやな、ああ、)

とびくりと頷うなずいて、

(火の車で行かさるか。)

馬鹿ばかにしている、……此奴こいつは高利貸か、鳥からすがね金を貸す爺婆じじばばだろうと思つたよ。」

と民弥さみは寂さみしそうなが莞爾にっこりした。

梅次うめつぎがちつと仰向あおむくまで、真顔で聞いて、

「まったくだわねえ。」

「いや、」

民弥は、思出したように、室の内をしながら、

「烏金……と言え、その爺婆は、荒縄で引括って、烏の死んだのをぶら下げたのよ。」

梅次は胸を突かれたように、

「へい、」と云つて、また、浅葱のその団扇の上へ、白い指。

「堪らない。幾日経つたんだか、べろべろに毛が剥げて、羽がぶらぶらとやつと繋つて、地へ摺れて下つてき、頭なんざ爛れたようにべとべとしている、その臭気だよ。何とも言えず変に悪臭いのは、——奴の身体では無い。服装も汚くはないんだね、折目の附いたと言いたいが、それよりか、皺の無いと言つた方が適い、坊さんか、尼のような、無地の、ぬべりとしたのでいた。

まあ、それは後での事。

（何の車？……）と聞返した。

（森の暗さを、真赤なものが、めいらめいら搦んで、車が飛んだでやいの。恐ろしやな、活きながら鬼が曳くさを見るかいや。のう殿。私は、これい、地板へ倒りようとしたがいの。……うふツ、）と腮の震えたように、せせら笑つたようだつけ、——ははあ……」

十五

「今の腕車くるまに、私が乗っていたのを知って、車夫わかいしが空からで駆下りた時、足の爪を轆ひかれたとか何とか、因縁を着けて、端銭はしたを強請ゆするんであろうと思った。

しかし言種いぐさが変だから、

(何の車?) ともう一度……わざと聞返しながら振返ると、

(火の車、)

と頭から、押冠おつかぶせるように、いやに横柄に言つて、もさりと歩行あるいて寄る。

なぜか、その人を咒のろつたような挙動しぐさが、無体に癩しやくに障つたろう。

(何の車?) と苛々いらいらとしてこちらも引返した。

(火の車、)

じりじりとまた寄つた。

(何の車?)

(火の車、)

(火の車がどうした。)

とちようど寄合させた時、少し口惜くやしいようにも思つて、突懸つっかかつて言った、が、胸を圧おさえた。可厭いやなその臭気においつたら無いもの。

(私わしに貸さい、の、あのや、燃え擲からまった車で、逢魔おうまケ時に、真北へさして、くるくる舞まいして行ゆかざるは、少わかい身に可ようないがいや、の、殿、……私わしに貸さい。車借りて飛ばしたい、えらく今日は足がなえたや、やれ、の、草臥くたびれたいの、やれやれ、)

と言つて、握拳にぎりこぶしで腰をたたくのが、突着けて、ちようど私の胸の処……というものは、あの、急な狭い坂を、奴やつは上の方に居るんだらう。その上、よく見ると、尻をこつちへ、向うむきに屈かがんで、何か言っている。

癩かに棒打ぼううち、喧嘩けんかにもならないか。

(どこへ行くんだい、そして、)ツて聞いて見た。

(同じ処への、)

(吉原か。)

(さればい、それへ。)

とこ言う。

(何しに行くんだね。)

(取揚げに行く事よ。)

ああ、産婆か。道理で、と私は思った。今時そんなのは無いかも知れんが、昔の産婆さんにはこんな風なのが、よくあつた。何だか、薄気味の悪いような、横柄で、傲慢で、人を舐めて、一切心得た様子をする、檀那寺の坊主、巫女などと同じ様子で、頼む人から一目置かれた、また本人二目も三目も置かせる気。昨日のその時なんか、九目という応接です。

なぜか、根性曲りの、邪慳な残酷なもののように、……絵を見てもそうだろう。産婦が屏風の裡で、生死の境、恍惚と弱果てた傍に、襷がけの裾端折か何かで、ぐなりとした嬰兒を引摺んで、盥の上へぶら下げた処などは、腹を断割つたと言わないばかり、意地くねの悪い姑の人相を、一人で引受けた、という風なものだっけ。

吉原へ行くと云う、彼処等じゃ、成程頼みそうな昔の産婆だ、とその時、そう思ったから、……後で蔦屋の二階で、皆に話をする時も、フツとお三輪に、(どこかお産はあるか)って聞いたんだ。

もうそう信じていた。

でも、何だか、肝かんが起たつて、じりじりしてね、おかしく自分でも自棄やけになって、

(貸すなしてやろう、乗すなつといで。)

(柔順すななものじゃ、や、よう肯きかしやれたの……おとおお。)と云いつて臀しりを動かうす。
変なものをね、その腰へ当てた手にぶら下げているじゃないか。——鳥とりの死骸しかいだ。

(何にする、そんなもの。)

(禁厭まじないにする大事なものの、これが荷物じゃ、火の車に乗せませんが、やあ、殿。)

(堪たまらない！ 臭くつて、)

と手巾ハンケチへ唾つばを吐ついて、

(車賃は払はらつておくよ。)

で、フイと分れたが、さあ、踏切を越すと、今の車はどこへ行つたか、そこに待まちつてい
る筈はずのが、まるで分らない。似たやつどころか、また近所に、一台も腕車くるまが無なかつた。∴

∴

変じゃないか。」

しばらくして、

「お三輪が話した、照吉が、京都の大学へ行つて弟の願懸けに行つて、堂の前で気落した、……どこだか知らないが、谷中の辺で、杉の樹の高い処から鳥が落ちて死んだ、というのを聞いた時、……何の鳥とも、照吉は、それまでは見なかったんだそうだけれども、私は何だよ……」

思わず、心が、先刻の暗がり坂の中途へ行つて、そのおかしな婆々が、荒縄でぶら提げていた、腐つた鳥の事を思つたんだ。照吉のも、同じ鳥じゃ無かろうかと……それに、可なり大きな鳥だというし……いいや！」

梅次のその顔色を見て、民弥は圧えるように、

「まさか、そんな事はあるまいが、ただそこへ考えが打撞つただけなんだよ。……」

だから、さあ、可厭な気持だから、もう話さないでおきたかつたんだけれども、話しかけた事じやあるし、どうして、中途から弁舌で筋を引替えようという、器用なんじや無い。まじまじ遣つた……もつとも荒ツぽく……それでも、鳥の死骸を持っていたツて、そう云うと、皆が妙に気にしたよ。

お三輪は、何も照吉のが烏だとも何とも、自分で言ったのじゃ無いから、別にそこまでは気を廻さなかつたと見えて、暗号あいずに袖を引張らなかつた。もうね、可愛いんだ、——ああ、可恐こわい、と思うと、極きまつたように、私の袂たもとを引張ひっぱたつけ、しっかりと持つて——左の、ここん処すわに坐すわつていて、

と猫板の下になる、膝のあたりを熟じつと視みた。……

「煙管きせる？」

「ああ、」

「上げましょう。……」

と、トンと払はたいて、

「あい。……どうしたんです、それから、可厭いやね、何だか私は、」と袖を合わせる。

「するとだ……まだその踏切を越えて腕車くるまを捜したツてまでにも行ゆかず……其奴そいつの風采ふうつきなんぞ悉くわしく乗出して聞くのがあるから、私は薄暗うすがりの中だ。判然はんぜんとはしないけれど、朧おぼろげ氣けに、まあ、見ただけをね、喋舌しゃべつてる中うちに、その……何だ。

向う角かくの女郎屋じよらやの三階さんかいの隅ぐもに、真暗まっくらな空へ、切つて嵌はめて、裾すそをぼかしたように部屋へ蚊帳かやを釣つて、寂然しんぜんと寝ているのが、野原の辻堂つじどうに紙帳しちやうでも掛けた風で、恐おそしくさび

れたものだ、と言つたつけ。

その何だよ。……

蚊帳の前へ。」

「ちよいと、」と梅次は、痙攣ひつつるばかり目を睜みはつて膝をずらした。

「大丈夫、大丈夫、」

と民弥はまたわずかに笑えみを含みつつ、

「仲の町越しに、こちらの二階から見えるんだから、丈が……そうさ、人にして二尺ばかり、一寸法師ツか無いけれど、何、普通で、離れているから小さいんだろう。……婆さんが一人。」

大きな蜘蛛くもが下りたように、行燈あんどうの前へ、もそりと出て、蚊帳の前をスーと通る。……擦れ擦れに見えたけれども、縁側を歩行あるいたろう。が、宙を行ゆくようだ。それも、黒雲の中にある、青田のへりでも伝うツて形でね。

京町の角の方から、水道尻の方へ、やがて、暗い処へ入って隠れたのは、障子の陰か、戸袋うしろの背後になつたらしい。

遣手やりてです、風が、大引前おおびけまえを見廻つたろう。

それが見えると、鉄棒かなぼうが遠くを廻った。……カラカラ、……カンカン、何だか妙だね、あの、どうか言うんだっけ。」

「チャン、カン、チャンカン……ですか。」と民弥の顔を瞻みつめながら、軽く火箸ひばしを動かしたが、鉄瓶にカタンと当たった。

「あ、」

と言つて、はつと息して、

「ああ、吃驚びっくりした。」

「ト今度は、その音に、ずっと引着けられて、廓くるわじゆう中の暗い処、暗い処へ、連れて歩行あるくか、と思うばかり。」

十七

「話してる私も黙れば、聞いている人たちも、ぴつたり静まる……

と遣手やりてらしい三階の婆ばばあ々の影が、蚊帳の前を真暗まっくらな空の高い処で見えなくなる、——とやがてだ。

二三度続け様に、水道尻居まわりの屋根近な、低い処で、鴉が啼いた。夜鳥も大引けの暗夜^{やみ}だろう、可厭^{いや}な声といったら。

すたすたとけたたましい出入りの登音^{あしおと}、四ツ五ツ入乱れて、駆出す……馳^{はしりこ}込むといつたように、しかも、なすりつけたように、滅入^{めい}つて、寮の門^{かど}が慌^{あわただ}しい。

私の袂^{たもと}を、じつと引張つて、

(あれ、照吉姉^{ねえ}さんが亡くなるんじやなくツて) ツて、少し震えながらお三輪が言うのと、

(引潮時だねちようど……) と溜息^{ためいき}をしたは、油絵の額縁^{こしら}を拵^{こしら}える職人風の鉄拐^{てつか}な人で、中での年寄だった。

婦人^{おんな}の一人が、

(姉さん、姉さん、)

と、お三輪を、ちようどその時だった、呼んだのが、なぜか、気が移つて、今息を引取ろうという……照吉の枕許に着いて言うような、こう堅くなつた沈んだ声だった。

(はい、)

とこれも幽^{かすか}にね。

浜谷ツて人だ、その婦人は、お蘭さんというのが、

(内にお婆さんはおいでですか。)

と聞くじゃないか。」

「まあ、」と梅次は呼吸を引く。

民弥は静に煙管を置いて、

「お才さんだつて、年じやあるが、まだどうして、姉^{あね}えで通る、……婆さんという見当では無い。皆^{みんな}、それに、それだと顔は知つている。

女中がわりに送^{おくりむかえ}迎^{むかひ}をしている、前に、それ、柳橋の芸者だつたという、……耳の遠い、ぼんやりした、何とか云う。」

「お組さん、」

「粹^{いき}な年増^{としま}だ、可哀相に。もう病氣であんなになつてはいるが……だつて白髪^{しろが}の役じや無い。

(いいえ、お婆さんは居ませんの。)

(そう……)

と婦人が言つたつけ。附着^{くつつ}くようにして、床の間の傍^{わき}正面^{しょうめん}にね、丸窓を背負^{しよ}つて坐つていた、二人、背後^{うしろ}が突抜けに階^{はし}子段^{ごだん}の大きな穴だ。

その二人、もう一人のが明座ツてやつぱり婦人で、今のを聞くと、二言ばかり、二人で密々ひそひそと言ったが否や、手を引張合ひっぱりあった様子で、……もつとも暗くつてよくは分らないが。そしてスーと立つて、私の背後うしろへ、足袋の白いのが颯さっと通つて、香水の薫かおりが消えるように、次の四畳を早足でもつて、トントンと階下したへ下りた。

また、皆みんな黙もつたつけ。もつとも誰が何をして、どこに居るんだか、暗いから分らない。しばらく、袂たもとの重かつたのは、お三輪がしつかり持つてるらしい。

急あがに上つて来ないだろう。

(階下したじゃ起きているかい。)

(起きてるわ、あの、だけど、才さあちゃんは照吉さんの許とこへちよつと行つてるかも知れなくてよ。)

(何は、何だつけ。)

(お組さん、……ええ、火鉢とこの許とこに居てよ。でも、もうあの通りでしょう、坐眠いねむりをしているかも知れないわ。)

(三輪ちゃんか、ちよつと見てあげてくれないか、はばかりが分らないのかも知れないぜ。)

(と一人気を着けた。)

(ええ、)

てツたが、もう可こ恐おそくツて一人では立てません。

もう一ツ、袂たもとが重おもくなつて、

(一所いしょに……兄あにさん、)

と耳みみの許とこへ口くちをつける……頬ほ辺べが冷ひやりとするわね、鬢びんの毛けで。それだけ内証ないしよのつもりだろうが、あの娘こだもの、皆みんな聞きえるよ。

(ちよいと、失礼しつれい。)

(奥方おくはたに言いつけますぜ。)と誰たれか笑わらつた、が、それも陰気いんきさ。」

十八

「暗はしこい階子かをすつと抜ひける、と階下かしたは電燈でんきだ、お三輪さんりんは颯さつと美しい。

見ると、どうです……二階にかいから下くだして来て、足の踏場ふみばも無なかった、食物しょくぶつ、道具どうぐなんか、掃はきいたように綺麗きれいに片附かたつきいて、門かどを閉とめた。節穴ふしあなへ明あかりが漏あれて、古いから森もりのよう、下くだした藪しとみを背うしろにして、上あがり 櫃がまちの、あの……客受きやくうけの六畳むつじやうの真中まんなか 処ところへ、二人、お太鼓おたいこの

帯で行儀よく、まるで色紙へ乗ったようですね、ける、かな、と端然と坐つてると、お組が、精々気を利かしたつもりか何かで、お茶台に載つかつて、ちゃんとお茶がその前へ二つ並んでいきます……

お才さんは見えなかつた。

ところが、お組があれだろう。男なら、骨でなり、勘でなり、そこは跋も合わせようが、何の事は無い、松葉ヶ谷の尼寺へ、振袖の若衆が二人、という、てんで見当の着かないお客に、不意に二階から下りて坐られたんだから、や、妙な顔で、きよとんとして。……次の茶の室から、敷居際まで、擦出して、煙草盆にね、一つ火を入れたのを前に置いて、御丁寧に、もう一つ火入に火を入れている処じゃ無いか。

座蒲団は夏冬とも残らず二階、長火鉢の前の、そいつは出せず失礼と、……煙草盆を揃えて出した上へ、団扇を二本の、もうちつとそのままにしておいたら、お年玉の手拭の残ったのを、上包みのまま持つて出て、別々に差出そうという様子でいる。

さあ、お三輪の顔を見ると、嬉しそうに双方を見較べて、吻と一呼吸を吐いた様子。

(才ちゃんは、)

とお三輪が、調子高に、直ぐに聞くと、前へ二つばかりゆつくりと、頷き頷き、

(姉さんは、ちよいと照吉さんの様子を見に……あの、三輪ちゃん。)

と戸棚へ目を遣つて、手で円いものをちらりと拵えたのは、菓子鉢へ何か？ の暗号。」

ああ、病気に、あわれ、耳も、声も、江戸の張さえ抜けた状は、糊を売るよりいいじらしい。

「お三輪が、笑止そうに、

(はばかりへおいでなすつたのよ。)

お組は黙つて頭を振るのさ。いいえ、と言うんだ。そうすると、成程二人は、最初からそこへ坐り込んだものらしい。

(こちらへいらつしやいな。) とその一人が、お三輪を見て可懐しそうに声を懸ける。

(佐川さん、)

と太く疲れたらしく、弱々とその一人が、もつとも夜更しのせいもあるう、髪もぱらつく、顔色も沈んでいる。

(どうしたんです。) と、ちようど可い、その煙草盆を一つ引攫つて、二人の前へ行つて、中腰に、敷島を一本。さあ、こうなると、多勢の中から抜出したので、常よりは気が置けない。

(頭痛でもなさるんですか、お心持が悪かったら、蔭へ枕を出させましょうか。)

(いいえ、別に……)

(御無理をなすつちや不可いけません。何だかお顔の色が悪い。)

(そうですかね。)とお蘭さんが、片頬かたほを殺そぐように手を当てる。

(ねえ、貴方あなた、お話ししよう。)

(でも……)

(ですがね、)

とちらちらと目くばせが閃ひらめく、——言おうか、言うまいかツて素振そぶりだろう。

聞かずにはおかれぬ。

(何です、何です、)

と肩を真ま中なかへ挟むようにして、私が寄る、と何か内証ないしよの事とも思つたろう、ぼけ

ていても、そこは育ちだ。お組が、あの娘こに目で知らせて、二人とも半分閉めた障子の蔭

へ。ト長火鉢のさしの向いに、結綿ゆいわたと円鬘まげが、ぽつと映って、火箸が、よろよろとして、

鉄瓶がぼつかり大きい。

お種さんが小さな声で、

(今、二階からいらつしやりがけに、物干の処で、)

とすこし身を窘めて、一層低く、

(何か御覧なさはしませんか。)

私は悚然とした。」

十九

「が、わざと自若として、

(何を、どんなものです。) って聞返したけれど、……今の一言で大抵分つた、婆々が居た、と言うんだろう。」

「可厭、」と梅次は色を変えた。

「大丈夫、まあ、お聞き、……というものは——内にお婆さんは居ませんか——ツて先刻お三輪に聞いたから。……

はたして、そうだ。

(何ですか、お婆さんらしい年寄が、貴下、物干から覗いていますよ。)

とまた一倍減入った声して、お蘭さんが言うのを、お種さんが取繕うように、

(気のせいかも知れませんが、多分そうでしょうよ……)

(いいえ、確^{たしか}なの、佐川さん、それでね、ただ顔を出して覗^{のぞ}くんじやありません。梟^{ふくろう}見^みたように、膝^{ひざ}を立てて、蹲^{しゃが}んでいて、窓の敷居の上まで、物干の板から密^{そつ}と出たり、入ったり、)

(ああ、可^い厭^やだ。)

と言つて、揃^{そろ}つて二人、ぶるぶると掃^{はら}消^{いけ}すように袖を振るんだ。

その人たちより、私の方が堪^{たま}りません。で無くつてさえ、蚊帳^{かや}の前を伝わった形が、昼間の闇^{くら}がり坂のに肖^にていて堪^{たま}らない処^{ところ}だもの、……鳥は啼^なく……とすぐにあの、寮の門^{かど}で騒^{さわ}いだらう。

気にしたら、どうして、突^{いき}然^{なり}ポンプでも打撒^{ぶちま}けたいくらいな処^{ところ}だ。

(いつから?……)

(つい今しがたから。)

(全体前^{ぜん}にから、あの物干の窓が気になつてしようがなかつたんですよ。……時々、電車^{でんしゃ}のですかね、電^{いなびかり}ですか、薄^あい蒼^おいのが、真^ま暗^{くら}な空へ、ぼっと映^さしますとね、黄色くなつ

て、大きな森が出て、そして、五重の塔の突とつ尖さきが見えるんですよ……上野でしようか、天竺てんじくでしようか、何にしても余程遠くで、方角が分りませんほど、私たちが見て凄すごかつたんです。

その窓に居るんですもの。()

(もつとお言いなさいよ。()

(何です。()

(可いや厭だ、私は、()

(もつとは？)

(貴あなた女おつしやいよ、()

と譲合とつた。トお種とさんが、障とのお三輪にも秘かくしたそうに、

(頭にね、何ですか、手拭てぬぐいのようなものを、扁ひらたく畳つんで載せているものなんです。貴あなた下なかお話しなの通りなの、……佐川さん。)

私は口が利けなかった。——無む暗やみとね、火入ひいれへ巻まきたばこをこすり着けた。

お三輪の影が、火鉢を越して、震えながら、結ゆい綿わたが円鬚まげに附く着ついて、耳はたの傍たで、

(お組さん、どこのか、お婆さんは、内へ入って来なくツて?)

(お婆さん……)

とぼやけた声。

(大きな声をおしでないよ。)

と焦^{じれ}つたそうにたしなめると、大きく合点^{がってん}々々しながら、

(来ましたよ。)

ときよとんととして、仰向いて、鉄瓶を撫^なでて澄まして言うんだ。「

「来たの、」

と梅次が蘇^{よみがえ}生^えつた顔になる。

「三人が入乱れて、その方へ膝を向けた。

御注進の意気込みで、お三輪も、はらりとこつちへ立って、とんと坐って、せいせい言
つて、

(来たんですって。ちよいと、どこの人。)

と、でも、やつぱり、内証で言つた。

胸から半分、障子の外へ、お組が、皆^{みんな}が、油へ水をさすような澄ました細^{ほそ}面^{おもて}の顔を
出して、

(ええ、一人お見えになりましたすよ。)

(いつさ?)

(今しがた、可厭な鴉が泣きましたろう……)

いや、もうそれには及ばぬものはまた意地悪く聞える、と見える。

(照吉さんの様子を見に、お才はんが駆出して行きなすった、門を開放したまんまでさ

皆が振向いて門を見たんだ。——

二十

「その癖門の戸は閉まっている。土間が狭いから、下駄が一杯、杖、洋傘も一束。大勢余り隙だから、歩行出したように、もぞりもぞりと籐表の目や鼻緒なんぞ、むくむく動く。」

この人数が、二階に立籠る、と思うのに、そのまた静さといったら無い。

お組がその儀は心得た、という顔で、

(後で閉めたんでございますがね、三輪ちゃん、お才はんが粗々かしく、はあ、)
と私達を見て莞爾しながら、

(駆出して行きなすった、直き後でございますよ。入違いぐらいに、お年寄が一人、その隅こから、扁平たいような顔を出して覗いたんでございますよ。)

何でも、そこで、お上さんに聞いて来た、とそう言いなすったようでしたつけ……すたすた二階へお上りでございました。)

さ、耳の疎いというものは。

(どこの人よ、)

とお三輪が擦寄って、急込んで聞く。

(どこのお婆さんですか。)

(お婆さんなの、ちよいと……)

私たちが訊ねたい意は、お三輪もよく知っている。闇がり坂以来、気になるそれが、爺とも婆とも判別が着かんじやないか。

(でしようよ、はあ、……余程の年紀ですから。)

(いいえさ、年寄だつてね、お爺さんもお婆さんもありますツさ。)

(それがね、それですがね三輪ちゃん。)
と頭を掉(かぶり)つて、

(どつちだかよく分りません。背(せい)の低い、色の黄色蒼(あお)い、突張(つつば)った、硝子(ビイドロ)で張つたように照(てら)々した、艶(つや)の可(い)い、その癖、随分よぼよぼして……はあ、手拭(てぬぐい)を畳んで、べつたり被(かぶ)つて。)

女たちは、お三輪と顔を見合わせた。

(それですが、どうかしましたか。)

(どうもこうもなくつてよ……)とお三輪は情(なさけ)ない声を出す。

(不可(いけ)ませんでしたかねえ。私はやつぱり会(い)にいらした方か、と思つて。)

……成程(な)な、

と民弥は言い掛けて苦笑した。

「会(い)へいらしたには相違(さ)は無い。

(今時分来る人があつて、お組(ぐ)さん。もう二時半だわ。)

(ですがね、この土地(ち)ですし……ちよいと、御散歩(ごさんぽ)にでもお出掛(い)けなすつたのが、帰(か)つて見えたかとも思(おも)いましたし……お怪(ば)怪(け)の話(わ)をする、老人(としより)は居(い)ないかツて、誰(ど)方(なた)かお才(さい)は

んに話しをしておいでだったし、どこか呼ばれて来たのかとも、後でね、考えた事ですよ。いえね、そんな汚い服装じゃありません。茶がかった鼠色の、何ですか無地もので、皺しわのないのを着てでした。

けれども、顔で覗いてその土間へお入んさすつた時は、背後うしろ向きでね、草履わらじでしよう、はきもの穿物を脱いだのを、突然いきなり懐中へお入れなさるから、もし、ツて留めたんですが、聞かぬ振ふりで、そして何です、そのまんま後びつしやりに、ずるツかざるツかそこを通つて、
と言われた時は、揃つて畳の膝すを摺すらした。

(この階はしご子段の下から、向直つてのつそりのつそり、何だか不躰ぶしつけらしい、きつと田舎のお婆さんだろうと思ひました。いけ強情な、意地の悪い、高慢なねえ、その癖くせしよなしよなして、どうでしょう、可おそろし恐おそろしい裾すそ長ながで、……地じへ引摺ひきずるんでございましょうよ。

裾すそ端はし折よを、ぐるりと揚げて、ちよいと帯の処へ挟くわんだんですがねえ、何ですか、大きな尻尾まを捲まいたような、変な、それは様子なんです。……

おや、無む面めん目めだよ、人の内へ、穿はきもの物を懐へ入れて、裾端折すそはしのまんま、まあ、随分なのが御連中の中に、とそう思つていたんですがね、へい、まぐれものなんでございませうか
()

わなわな震えて聞いていたつけ、堪らなくなつた、と見えてお三輪は私に縋り着いた。
 いや、お前も、可恐ながる事は無い。……

もう、そこまですになると、さすがにももの分つた姉さんたちだ、お蘭さんもお種さんも、
 言合わせたように。私にも分つた。言出して見ると皆同一。……

二十一

「茶番さ。」

「まあ！」

「誰か趣向をしたんだね、……もつとも、昨夜の会は、最初から百物語に、白装束や打散らし髪で人を怯かすのは大人気無い、素にしよう。——それで、電燈だつて消さないつもりでいたんだから。」

けれども、その、しないという約束の裏に行くのも趣向だろう。集つた中にや、随分娯婆気なものも少くない。きつと誰かが言合せて、人を頼んだか、それとも自から化けたか、暗い中から密と摺抜ける事は出来たんだ。……夜は更けたし、潮時を見計らつて、……

…確たしかにそれに相違無い。

トそういう自分が、事に因ると、茶番の合あい棒ぼう、発頭人ほつとうにんと思われているかも知れん。先刻入さつきったという怪しい婆ばあ々が、今現に二階に居て、傍はたでもその姿を見たものがあると思れば…：…似たようなものの事を私が話したんだから。

(誰かの悪戯いたずらです。)

(きつとそう、)

と婦人おんなだちも納得した。たちまち雲霧が晴れたように、心持もさっぱりしたろう、急に眠気ねむけが除とれたような気がした、勇氣は一倍。

怪けしからん。鳥の羽おびやに怯おびかされた、と一の谷に遁にげ込んだが、緋ひの袴はかままじりに鶴ひよどり越ごえを逆寄さかよせに盛返もす…：…となると、お才さんはまだ帰かえらなかつた。お三輪も、恐こわいには二階が恐おそい、が、そのまま耳みみの疎うといのと差さ対たいいじやなお遣切やりきれなかつたか、また袂たもとが重おもくなつて、附くっ着ついて上あります。

それでも、やつぱり、物干の窓の前は、私はじめ悚然ぞっとしたつけ。

ばたばたと忙せわしそうに皆坐みんなつた、旧もとの処へ。

で、思い思いではあるけれども、各めいめい自暗じがりの中を、こう、…：…不気味も、好ものずき事も、

負けない気も交つて、その婆々だか、爺々だか、稀有な奴は、と透かした。が居ない……」
梅次が、確めるように調子を圧えて、

「居ないの、」

「まあ、お待ち、」

と腕を組んで、胡坐を直して、伸上つて一呼吸した。

「そこで、連中は、と見ると、いやもう散々の為体。時間が時間だから、ぐったり疲切つて、向うの縁側へ摺出して、欄干に臂を懸けて、夜風に当たっているのなどは、まだ確な分で。突臥したんだの、俯向いたんだの、壁で頭を冷しているのもあれば、煙管で額へ突支棒をして、畳へのめつたようなものもある。……夜汽車が更けて美濃と近江の国境、寢覚の里とでもいう処を、ぐらぐら揺つて行くようで、例の、大きな腹だの、瘦せた肩だの、帯だの、胸だの、ばらばらになつたのが遠灯で、むらむらと一面に浮いて漾う。

(佐川さん、)

と囁くように、……幹事だけに、まだすっかりしていた沢岡でね。やっぱり私の隣りに坐つたのが、

(妙なものをお目に懸けます。)

(え、)

それ、婆々か、と思うとそうじや無い。

(縁側の真中の——あの柱に、凭懸ったのは太田(西洋画家)さんですがね、横顔を御覧なさい、頬がげつそりして面長で、心持、目許、ね、第一、髪が房々と真黒に、生際が濃く……灯の映る加減でしょう……どう見ても婦人でしょう。婦人も、産後か、病上がりてった、あの、凄(すげ)い蒼(あおしろ)白(しろ)さは、どうです。

もう一人、)

と私の脇の下へ、頭を突込むようにして、附着いて、低く透かして、

(あれ、ね、床の間の柱に、仰向けに凭れた方は水島(劇評家)さんです。フト口を開きか何か、寝顔はという躰で、額から顔へ、ぺらりと真白は手巾を懸けなすつた……目鼻も口も何にも無い、のつぺらぼう……え、百物語に魔が魅すつて聞いたが、こんな事を言うんですぜ。)

ところが、そんなので無いのが、いつか魅し掛けてあるので気になる……」

「そうすると、趣向をしたのはこの人では無いらしい、企謀もくろんだものなら一番懸ばけに、婆ばあ々あを見着ばあけそうなものだから。

(ねえ、こつちにもう一つ異体いいていなのは、注連しめでも張りそうな裸のお腹、……)

(何なにじやね、)と直ただきに傍そばだったので、琴の師匠は聞き着きけたが、

(いいえ、こちらの事で。)幹事かんじが笑わらうと、欠伸あくびまじりで、それなり、うとうと。

(まあ、これは一番正体が知しれていますが、それでも唐突だしぬけに見ると吃驚びっくりしますぜ。で、やっぱりそれ、燭しよく台たいの傍わきの柱はしらに附くっ着ついて胡坐あぐらでさ。妙たぎに人相ぎよう形ていの変へったのが、

三つとも、柱の処ところですからね。私も今しがた敷居しきい際ぎわいの、仕切の壁の角を、摺出ずりだした処ところですよ。

どうです、心得こころえているから可いいようなものの、それでいながら変へに凄すごい。気の弱い方が、転寝うたたねからふつと覚さ醒め際に、ひよつと一目見ひとめたら、吃驚びっくりしますぜ。

魔物まもつもやっぱり、蛇へびや蜘蛛くもなんぞのように、鴨居かもいから柱を伝つたって入いって来きると見えまますな。

(可い厭いやですすね。)

婦人は二人、颯と衣紋を捌いて、櫥子窓の前を離れた、そこにも柱があつたから。

そして、お蘭さんが、

(ああ、また……開いていますね。)

と言うんだ。……階下から二階へ帰掛けに、何の茶番が！ で、私がぴつたり閉めた筈。その時は勿論、婆々も爺々も見えなかつた、——その物干の窓が、今の間に、すかり、とこう、切放したように、黒雲立つて開いている。

お種さんが、

(懾り様、どうかそこをお閉め下さいまし。)

こう言つて声を懸けた。——誰か次の室の、その窓際に坐っているのが見えたんだろう。お聞き……そうすると……壁腰、——幹事の沢岡が氣にして摺退いたという、敷居外の柱の根の処で、

(な、)

と云う声だ！ 私は氷を浴びたように悚然とした。

(閉い言うて、云わしやれても、な、埒明かん。閉めれば、その跡から開けるで、やいの。)

聞くと、筋も身を引釣つた、私は。日暮に谷中の坂で聞いた、と同じじゃないか。もつとも、年寄りには誰某と人を極めないと、どの声も似てはいるが。

それに、言い方が、いかにも邪慳に、意地悪く聞えたせいとか、幹事が、相手は知らず、ちよつと詰るように、

(誰が明けます。)

(誰や知らん。)

(はあ、閉める障子を明ける人がありますか。)

(棺の蓋は一度じゃが、な、障子は幾度でも開けられる、閉てられるがいの。)

(可いから、閉めて下さい、夜が更けて冷えるんですから、)と幹事も不機嫌な調子で言う。

(惜きましよ。透通いて見えん事は無けれどもよ……障子越は目に雲霧じゃ、覗くにはつきりとよう見えんがいの。)

(誰か、物干から覗くんですかね。)

(彼にも誰にも、大勢、な、)

(大勢、……誰です、誰です。)

と、幹事もはじめて、こう逆に捻向ねじむいて背後うしろを見た。

(誰や言うてもな、殿、殿たちには分らぬ、やいの、形も影も、暗い、暗い、暗い、見えぬぞ、殿。)

(明るくしよう、)

と幹事も何か急せきこ込んで、

(三輪みいちゃん、電燈でんきを、電燈でんきを、)

と云つたが、どうして、あの娘こが動き得ますか。私の膝こに、可哀相こに、襟えりを冷たくして突つ臥ぶしたツきり。

「措おきませ、措おきませい。無駄な事よ、殿、地獄の火でも呼ばぬ事には、明るくしてかて、殿たちの目に、何が見えよう。……見えたら異事ことじやぞよ、異事ことじやぞよ、の。見えぬで僂しあわせ倅せいの、……一目見たら、やあ、殿、殿たちどうなろうと思わさる。やあ、)

と口を、ふわふわと開けるかして、声こゑが茫ぼうとする。」「

「幹事が屹ぎつとして、

(誰です、お前さんは、)

と聞いた。この時、睡ねむっていない人が一人でもあるとすれば、これは、私はじめ待構たいこうえ
た問とだつた。

(私わしか、私か、……殿、)

と聞返して、

(同じ仲間のものじゃが、やいの。)

(夥なかま間？ 私たちの？)

(誰がや、……誰がや、)

と嘲あざけるように二度言つて、

(殿たちの。私わしが言うは近間に居る、大勢の、の、その夥間なかまじゃ、という事いの。)

(何かね、廓くわくわの人かね。)

(されば、松の森、杉の林、山やま懐ふところの廓くわくわのものじゃ。)

(どこから来ました。)

(今日は谷中の下した闔やみから、)

(佐川さん、)

と少し声高に、幹事が私を呼ぶじやないか。

私は黙っていたんだ。

しばらくして、

(何をしに……)

(「とりあげ」をしようために、な、殿、「とりあげ」に来たぞ、やいの。)

(あかんぼ 嬰兒を産ませるのか。)

(今、無い、ちょうど間に合うて「とりあげ」る小児こどもは無い。)

(そんな、あつら 誂えたようなお産があるものか、お前さん、頼まれて来たんじや無いのかね。)

(さればのう、頼まれても来たれど、な、催促にももう来たがいの。来たれども、仔細しさい

あつてまだ「とりあげ」られぬ。)

(むむ、まだ産れないのか。)

(何がいの、まだ、死にさらさぬ。)

(死……死なぬとは?)

(京への、京へ、遠くへ行ている、弟和郎わろに、一目未練ひとめが残るげな。)

幹事はハタと口をつぐんだ。

(そこでじゃがや、姉あねめが乳の下の鳩みずおち落おちな、蝮まむし指ゆびの蒼あおい爪つめで、ぎりぎりきりと錐きりを揉もんで、白い手足をもがもがと、黒髪を煽あおつて悶もだえるのを見て、鳥ならば活いきなながら、羽け毛ばを撈むしつた処ところよの。さて、それだけで帰りがけじやい、の、殿、その帰るさに、これへ寄つた。
)

(そこに居るのは誰だ。)

と向うの縁側の処から、子爵が声を懸けた。……私たちは、フト千騎の味方を得たように思う。

ト此方こなたで澄すまして、

(誰でも無いがの。)

(いや、誰でも構わん。が、洒落しやれも串じょうだん戯ごも可い加か減げんにした方が可いと思う。こう言う
と大人気ないが、婦人も居てだ。土地つ児この娘も聞きいてる……一座をすれば我々の連中だ。
悪いたずら戯ごも可いが、余り言う事が残酷過ぎる。……外の事じやない。

弟を愛して、——それが出来得る事でも出来ない事でも、その身代りに死ぬと云つて覚悟かくごをしている大病人。現に、夜伽よしぎをして、あの通り、灯あかりがそこに見えるじやないか。

それこそ、何にも知らぬ事だ。ちつとも差支えは無いようなものの、あわれなその婦を、直ぐ向うに苦しませておいて、呑氣のんきそうに、夜通しのこの会さえ、何だか心ないような気がして、私なんぞは鬱ふさいでいるんだ。

仕様もあろうのに、その病人を材料たねにして、約束の生命いのちを「とりあげ」に来たが、一兄弟を見たがるから猶予をした、胸に爪を立てて苦しませたとはどうだ。

聞いちやおられん、余り残酷あんなで。可加減いかげんにしておきなさい。誰だか。――と凜々りんりんと云う。

聞きも果てずに、

(酷むごいとは、酷いとは何じや、の、何がや、向うの縁側のその殿、酷いとはいの、やいの、酷いとはいの。)

と畳掛けるように、しかも平気な様子。――向うの縁側のその殿――とは言種いぐさがどうだい。」

「子爵が屹ぎつとなつて、坐り直つた様ようだつて。

（知らんか、残酷という事を、知らなけりや聞かせようじやないか、前へ出ないか、おい、こつちへ入らんか。）

（行ゆこうのう、殿、その傍そばへ参ろうじやがの、そこに汚穢むさいものがあるうがや。早やそれが、汚穢むさうて汚穢むさうてならぬ。……退のけてくされませ、殿、）と言うんだ。

（汚むさいもの、何がある。）

（小井に入れた、青梅の紫蘇しそまき巻じや。や、香もならぬ、ふつふつ。ええ、胸悪やの、先刻さつきにから。……早く退どけしやらぬと、私わしも嘔吐もどそう、嘔吐もどそう、殿、）

茶うけに出ていた甘露梅の事だ。何か、女児おんなごも十二三でなければ手に掛けないという、その清しやうじやう 浄な梅漬を、汚穢むさくてならぬ、嘔吐もどすと云う。

（吐きたければ吐け、何だ。）

（二寸の蚯蚓みみず、三寸の蛇、そろそろと嘔吐すが怪けしゆうないか。）

余り言種いにくさが自棄やけだから、

（蛇や蚯蚓は構わんが、そこらで食つて来た饅飩うとんなんか吐かれては恐縮だ。悪い酒を呷あおつたろう。佐川さん、そこらにあつたら片附けておやんなさい。）

私は密と押遣つて、お三輪と一所に婦人だちを背後へ庇つて、座を開く、と幹事も退いて、私に並んで楯になる。

次の間かけて、敷居の片隅、大きな畳の穴が開いた。そこを……もくもく、鼠に茶色がかつた朦朧とした形が、フツ、と出て、浮いて、通つた。――

どうやら、臀から前へ、背後向きに入るらしい。

ト前へ被さつた筈だけれども、琴の師匠の裸の腹はやつぱり見えた。縁側の柱の元へ、音もなく、子爵に並んだ、と見ると、……気のせいだろう、物干の窓は、ワヤワヤと氣勢立つて、奴が今居るあたりまで、ものの推込んだ様子がある。なぜか、向うの、その三階の蚊帳が、空へずつと高くなつたように思う。

ちようど、子爵とその婆との間に挟まる、柱に凭れた横顔が婦人に見える西洋画家は、フイと立つて、真暗な座敷の隅へ姿を消した。真個に寐入つていたのでは無かつたらしい。

（残酷というのほね、仮にもしろ、そんな、優しい、可憐い、――弟のために身代りになるというような、若い人の生命を「とりあげ」に来たなどという事なんだ。世の中には、随分、娑婆塞げな、死損いな、）

と子爵も間近に、よくその婆々を認めたらう、……当てるように、そう言つて、

(邪魔な生命もあるもんだ。そんな奴の胸に爪を立てる方がまだしもだな。)

(その様な生命はの、殿、殿たちの方で言うげな、……病ほうけた牛、瘦せさらばえた馬で、私等がにも役にも立たぬ。……あわれな、というはの、膏の乗った肉じゃ、いといといはの、薫の良い血じゃぞや。な、殿。——此方衆、鳥を殺さしやるに、親子の恩愛を思わつしやるか。獣を殺しますに、兄弟の、身代りの見境があるかいの。魚も虫も同様での。親があるやら、一粒種やら、可愛いもの、いとしいの、分隔てをめされますかの。弱いものいうたら、しみんしやくもさしやらず……毛を、腹を抜く、背を刮く……串刺じゃ、ししびしおじや。油で煮る、火炎で焼く、活きながら鱈にも刻むげなの、やあ、殿。……餓じくばまだしもよ、榮耀ぐいの味醂蒸じゃ。

馴れば、ものよ、何がそれを、酷いとも、いとしいとも、不便なとも思わず。——一ツでも繋げる生命を、二羽も三頭も、飽くまでめさる。また食おうとさしやる。

誰もそれを咎めはせまい。咎めたとて聞えまい、私も言わぬ、私もそれを酷いと言わぬぞ。知らぬからじゃ、不便もいとしいも知らねばこそいの。——何と、殿、酷い事を知らぬものは、何と殿、殿たちにも結構に、重宝にあらうが、やいの、のう、殿。)

(何とでも言え、あいて対手にもならん。それでも何か、そういうものは人間か。)
と吐出すように子爵が言った。」

二十五

「ト其そいつ奴が薄笑いをしたようで、

(何じや、や、人間らしく無いと言うか。誰が人間になろうと云うた。殿たち、人間がさほどえら豪いか、へ、へ、へ、へ、)
とさげすんで、

(この世のなかはの、人間ばかりのもので無い。私等わしらが国はの、——殿、殿たちが、目の及ばぬ処、耳に聞えぬ処、心の通わぬ処、——広大な国じやぞの。

殿たちの空を飛ぶ鳥は、私等わしらが足の下を這はい廻る、水底みなそこの魚うおが天翔あまかける。……烏帽えぼし子を被かぶつた鼠、素袍すわうを着た猿、帳面かぶつける狐も居る、竈かまどを炊く犬も居る、鼬いたちが米舂こめつく、蚯蚓みみずが歌う、蛇が踊る、……や、面白い世界じやというて、殿たちがものとは較べられぬ。

何——不自由とは思わねども、ただのう、殿たち、人間が無いに因って、時々来ては攫さら

えて行く……老若男女の区別は無い。釣針にかかった勝負じや、緑の髪も、白髪も、顔はいろいろの木偶の坊。孫等に人形の土産じやがの、や、殿。殿たち人間の人は、私等が国の玩弄物じやがの。

身代りになる美しい婦なぞは、白衣を着せて雛にしよう。芋殻の柱で突立たせて、やの、数珠の玉を胸に掛けさせ、

いや、もう聞くに堪えん。

(まあ、面を取れ、真面目に話す。)と子爵が憤ったように言う。

(面、)

(面だ。)

面だ、面だ、と囁く声が、そこそこに、ひそひそ聞えた。眠らずにいた連中には、残らず面に見えたらしい。

成程、そう言えば、端近へ出てから、例の灯の映る、その扁平い、むくんだ、が瓜核といった顔は、蒼黄色に、すべすべと、皺が無く、艶があつて、皮一重曇つた硝子のように透通つて、目が穴に、窪んで、掘つて、眉が無い。そして、唇の色が黒い。気が着くと、ものを云う時も、奴、薄笑をする時も、さながら彫刻けたもののように静とし

たツきり、口も頬もビクとも動かぬ。眉……眉はぬつペリとして跡も無い、そして、てぬぐ手を畳んだらしいものを、額下りに、べたん、と頭へ載せているんだ。

(いや、いや、)

と目鼻の動かぬ首を振って、

(除るまい、除らぬは慈悲じや。この中には、な、画を描き彫刻をする人もある、その美しいものは、私等が国から、遠く指す花盛じや、散らすは惜しいに因って、わざと除らぬぞ!……何が、気の弱い此方たちが、こうして人間の面を被っておればこそ、の、私わしが顔を暴露いたら、さて、一堪りものう、髯が生えた玩弄物に化ろうが。)

(灯を点けよう、何しろ。)

と、幹事が今は蹠踉けながら手探りで立とうとする。子爵が留めて、

(お待ちなさい。串戯も嵩じると、拔差しが出来なくなる。誰か知らんが、悪戯がちと過ぎます。面は内証で取るが可い、今の内ならちつとも分らん、電燈を点けてからは消え憎くなるだろう。)

子爵はどこまでも茶番だ、と信ずるらしい。

……後で聞くと、中には、あいてこしら对方を拵えてうけこたえ応答をする、子爵その人が、悪戯をしてい

るんだ、と思つたのもあつたんだ。

(明るさ、暗さの差別は無いが、の、の、殿、私がしよう事、それをせねば、日が出ましても消えはせぬが。)

(可、何をしに来たんだ、ここへ。……まあ、仮にそっちが言う通りのものだとすると。)
(されば、さればの、殿。……)

とまた落着いたように、ぐたりと胸を折つた、蹲つた形が挫けて見えて、

(身代りが、——その儀で、やいの、の、殿、まだ「とりあげ」が出来ぬに因つて、つな、このあたりで、間に合わせに、奪ろう！……さて、どれにしようぞ、と思つて見入つて、視め廻っていたがやいの、のう、殿。)

みな — 黙つた。

(殿、ふと気紛れて出て、思懸のう懇申した験じや、の、殿、望ましいは婦人どもじや、何と上臈を奪ろうかの。)

おんな 婦人たちのその時の様子は、察して可かろう。」

「奴は勝ほこつた体で、毛筋も動かぬその硝子面を、穴蔵の底に光る朽木のように、仇艶を放つてしながら、

(な、けれども、殿、殿たちは上臈を庇わしやろうで、懇申しした効に、たつてとはよ
う言わぬ。選まつしやれ、選んで指さつしやれ、それを奪ろう。……奪ろう。……それを
奪ろう！ やいの、殿。)

と捲し掛けて、

(ここには見えぬ、なれども、殿たちの妻、子、親、縁者、奴婢、指さつしやれば、
たちどころに奪つて見しよう。)

と言語道断な事を。

とはたはたと廂の幕が揺動いて、そのなぐれが、向う三階の蚊帳を煽つた、その時、雨
を持った風が颯と吹いた。

(また……我を、と名告らつしやれ……殿、殿ならば殿を奪ろう。)

(勝手にしろ、馬鹿な。)

と唾吐くように、忌々しそうに打棄つて、子爵は、くるりと戸外を向いた。

(随意まにしようでは氣迷まうぞいの、はて?……)

とその面はついたりで、畳込んだ腹の底で声が出る。

(さて……どれもこれも好ましい。やあ、天井、屋の棟にのさばる和郎等わらうら！ どれが望み
じゃ。やいの、)

と心持仰向くと、不意に何と……がらがら、どど、ガツと鼠ねずみか鼬いたちだろう、蛇まじも交るか、
凄すさましく次の室まを駆けて荒廻ると、ばらばらばらばらと合せ目を透ほいて埃ほこりが落ちる。

(うむ、や、和郎等わらうら。埃を浴びせた、その埃のかかったものが欲ほいと言うかの——望みか
いの。)

ばたばた、はらはらと、さあ、情なさけない、口惜くやしいが、袖たもとや袂はたを払はいた音。

(やれ羽打はつ、へへへ、小鳥のように羽搔はがを煽あおつ、雑魚ざごのように匆はねる、へへ。……さて、
騒さわぐまい、今がはそで無い。そうでは無いげじゃ。どの玩弄物おもちゃ欲しい、と私わしが問うたでの、
前まへへ悦喜えきの雀こおどり躍よりじゃ、……這奴等しやつら、騒さわぐまい、まだ早い。殿とのたち名告ならずば、やがて、
選えろう、選取よりに私わが選よつて奪とろう！)

(勝手かたにして、早く退座たいざをなさい、余りといえけば怪けしからん。無礼むれいだ、引取ひれ。)
と子爵しきやくが喝かくした、叱しかつたんだ。

(催促をせずと可うござる。)

と澄まし返つて、いかにも年寄くさく口の裡で言った、と思うと、

(やあ、)

と不意に調子を上げた。ものを呼びつけたようだっけ。幽に一つ、カアと聞えて、またたく間に、水道尻から三ツのその灯の上へかけて、棟近い処で、二三羽、四五羽、鳥が啼いた、可厭な声だ。

(カアカアカア——)

と婆々が遣つたが、嘴も尖つたか、と思う、その黒い唇から、正真の鳥の声を出して、

(カアカア来しやれえ！ 火の車で。)

と喚く、トタンに、吉原八町、寂として、廓の、地の、真中の底から、ただ一ツ、カラカラと湧上つたような車の音。陰々と響いて、——あけ方早帰りの客かも知れぬ——空へ舞上つたように思うと、凄い音がして、ぼツさりと何か物干の上へ落ちた。

(何だ！)

と言うと、猛然として、ずんと立つて、堪えられぬ……で、地響で、琴の師匠がずか

ずかに行つて、物干を覗いたつけ。

裸脱ぎの背に汗を垂々と流したのが、灯で幽に、首を暗夜へ突込むようにして、

（おお、稲妻が天王寺の森を走る、……何じや、これは、烏の死骸をどうするんじやい。）
と引搦んで来て、しかも癩に障った様子で、婆々の前へ敲きつけた。

あ、弱つた。……

その臭氣といつたらない。

皆、ただ呼吸を詰めた。

婆々が、ずらずらとその蛆の出そうな烏の死骸を、膝の前へ、蒼い頤の下へ引附けた。」

二十七

「で、頭を下げて、熟と見ながら、

（蠅よ、蠅よ、蒼蠅よ。一つ腸の中を出され、ボーンと。——やあ、殿、上、藤たち、

私あの、今ここを引取るついでに、蒼蠅を一ツ申そう。ボーンと飛んで、額、頸首、背、手足、殿たちの身体にボーンと留まる、それを所望じや。物干へ抜いて、大空へ奪つて帰

ろう。名告らしやれ。蠅がたからば名告らしやれ。名告らぬと卑怯なぞ。人間は卑怯なものと思うぞよ。笑うぞよ……可いか、蒼蠅を忘れまい。

蠅よ、蠅よ、蒼蠅よ、ボーンと出され、おじやった！ おお！

一座残らず、残念ながら動揺めいた。

トふわりと起ったが、その鳥の死骸をぶら下げ、言おうようの無い悪臭を放って、一寸、一寸、一尺ずつ、ずるずると引いた裾が、長く畳を摺ったと思うと、はらりと触ったかして、燭台が、ぼったり倒れた。

その時、捻向いて、くなくなど首を垂れると、摺った後、棲を、あの真黒な嘴で、ぐい、と啣えて上げた、と思え。……鳥のような、獣のような異体な黄色い脚を、ぬい、と端折った、傍若無人で。

(ボーン、ボーン、ボーン、)と云うのが、ねばねばと、重ってくるしく、納豆の糸を引くように、そして、点々と切れて、蒼蠅の羽音やら、奴の声やら分らぬ。

そのまま、ふわりとして、翩然と上った。物干の暗黒へ影も隠れる。

(あれ。)

と真前に言ったはお三輪で。

(わ、)とまた言った人がある。

さあ、膝で摺る、足で退く、ばたばたと二階の口まで駆出したが、
(ええ)と引返したのは誰だっけ。……蠅が背後から縋つたらしい。

物干から、

(やあ、小鳥のように羽打つ、雑魚のように匆ねる。はて、笑止じやの。名告れ、名告らぬか、さても卑怯な。やいの、殿たち。上臈たち。へへへ、人間ども。ボーン、ボーン、ボーン、あれ、それぞれ転ぶわ、めるわ、這うわ。とまったか、たかったか。誰じゃ、名告れ、名告らぬか、名告れ。……ボーン、)

と云う時、稲妻が閃めいて、遠い山を見るように天王寺の森が映った。
皆ただ、蠅の音がただ、雷のように人々の耳に響いた。

ただ一縮みになった時、

(ほう、)

と心着いたように、物干のその声が、

(京から人が帰ったような。早や夜もしらむ。さらば、身代りの婦を奪ろう!……も一つ他にもある。両の袂で持重ろう。あとは背負うても、抱いても荷じゃ。やあ、殿、上臈

たち、此方衆こなたしゆにはただ遊うだじやいの。道すがら懇申ねんごろした戯たわむれじや。安堵あんどさつしやれ、蠅たなそこは掌へ、ハタと掴つかんだ。

さるにても卑怯ひせつなの、は、は、は、梅干で朝の茶まいれ、さらばじや。)

ばつと屋上やのうえを飛ぶ音がした。

フツと見ると、夜が白しらんで、浅葱あさぎになつた向うの蚊帳かやへ、大きな影がさしたつけ。けたましい悲鳴が聞えて、白地の浴衣を、扱帯しきも蹴出けだしも、だらだらと血だらけの婦おんなの姿が、蚊帳の目が裂けて出る、と行燈あんどうが真赤まっかになつて、蒼い細い顔が、黒髪かみを被かぶりながら黒雲の中へ、ばつたり倒れた。

ト車軸を流す雨になる。

電燈でんとうが点ついたが、もうその色は白かつた。

婆々ばばあの言つた、両の袂の一つであるう、無理心中で女郎が一人。――
戸を開ける音、閉める音。人影が燈籠とうろうのように、三階で立騒いだ。

照吉は……」

と民弥は言つて、愁然しゆうぜんとすると、梅次も察して、ほろりと泣く。

「ああ、その弟ばかりじやない、皆みんなの身代りになつてくれたように思う。」

明治四十四（一九一三）年三月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

2004（平成16）年3月20日第2刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十三卷」岩波書店

1941（昭和16）年6月30日発行

※誤植の確認には底本の親本を参照しました。

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2006年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

吉原新話

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>